BROADCAST CREATORS ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No.86

2019.11.29

〒102-0094　千代田区紀尾井町１－１　千代田放送会館　３階 TEL &fax03-3221-0019　Mail info@hosojin.jp
発行　一般社団法人・放送人の会　会長　今野　勉　編集担当　伊藤雅浩（広報委員長・編集長）、菅野高至（ＨＰ担当）、鈴木典之、逸見京子、藤田知久（カメラ担当）松尾羊一　事務局　千葉邦彦　須斎恵美子

「地方の時代」映像祭レポート

放送人の会　会長　今野　勉

大阪の関西大学で開催された第39回「地方の時代」映像祭に出かけてきた。

初日、11月16日の記念講演とそれに続くシンポジウムにパネリストして参加することが私の役目だった。

紙数の都合で、私の講演は省略し、シンポジウム「メディアは地域の課題とどう向き合うか」について報告する。

① コミュニティーFM、ケーブルテレビそして民放テレビ地方局

パネリストとして参加したのは、いわゆるコミュニティーFMラジオ局である「鹿児島シティーエフエム」の社長・米村秀司氏。

鳥取県米子市に拠点を置くケーブル・テレビの「中海（ちゅうかい）テレビ放送」の社長・加藤典裕氏。

そして、JNN系列のテレビ局である富山市の「チューリップテレビ」の取締役・服部寿人氏。

それぞれ異なった地方の異なったメディアに係わる三人である。共通するのは、三社とも商業放送であることだ。自分で営業して収入を得なければならない。

その厳しさを、まず初めに表明したのは、鹿児島シティーエフエムの米村氏だ。

全国約３００のコミュニティーFMのうち、７割が経営難だという。ジャーナリズムがどうのこうの言う前に、まず、自分たちの声は、リスナー（聴取者）の役に立っているか、どうか、それがコミュニティーFM局の拠って立つ原点だ、と、率直に話をした。航空会社の欠航便についての伝え方でも、一便一便の欠航の状況を具体的に知らせるなど、ほんとうに役に立つために心を砕いている、とのこと。リスナー一人一人がFM局のナマ支援者なのだ。

実利一点張りのように見える米村氏だが、私と会っての開口一番が「学生時代、今野さんたちの書いた『お前はただの現在にすぎない』を読んだが、半分も解らなかった。ところが今読み直してみると、よく解るんです」だった。実利と理想、もちろん、どちらも必要なものだ。

中海テレビの加藤氏が披露した、社の事業の多様さは、テレビ局のイメージを遥かに越えたものだった。電力の地産地消、中海（なかうみ）水質改善運動、若者のリクルート事業、などなどなど。目的は、地域住民のため―。

何より驚かされたのは、収入源の９割が地域住民のケーブルテレビ利用料だということだ。中海テレビと地域住民は「メンバーシップ」という理念で結ばれている、という。

「メンバーシップによる地域ケーブルテレビ局の運営」。これからの時代の新たな放送局の未来像を見た思いがした。

チューリップテレビは、県会議員の政治活動費不正を、地道な伝票読みで暴き出したことで有名になったが、服部氏は、発端は、何かおかしいという素朴な疑問からだった、という。

あの時は、キー局のＴＢＳの支援を受けて助けられたが、今は、キー局の支援をあてにしない独自の道を、県民の信頼を基盤に歩み始めている。キー局は、地方局を支援する余力を失っている。これからはそれを好機として、地域に根ざしたテレビ局として生きのびていこうとしている。

② 地域公共放送の時代の始まりなのか

３局とも商業放送である。商業放送とは、企業や団体の広告費を収入源として経営される放送、という意味である。確かに、たとえば鹿児島シティーエフエムの経営は地元企業80社近くの広告費に支えられている。

しかし、シンポジウムでの３社のパネリストの発言から見えてきたのは、地域住民の一人一人の信頼によって支えられる経営であり、地元企業もまた地域住民としての顔を持っているという状況だ。

地域住民に根ざした放送局が、地域住民の経済的、奉仕的支援で成立する時代が来ているということなのか。

私の先走りすぎる思いこみだろうか。

かつて、イラストレーターの真鍋博氏が、ある民放テレビの番組作りに共感し、支援するために、いくばくかのお金を持って訪ねたところ、テレビ局から受け取りを断られたという話を聞いたことがあった。氏は無念そうだった。なぜ、私たちは、民放局に受信料を払えないのか。

シンポジウムを終えて、私は、真鍋氏の言葉を思い返している。

第19回「日韓中テレビ制作者フォーラム興義大会」

場所　中国貴州省黔西南少数民族自治州
　　興義市皇冠ホテル

作品テーマ
「多彩で多元的なアジア文明の多様性」
各国3本（ドラマ・エンターテイメント・ドキュメンタリー）12作品が上映され、論議された。

大会日程

10月29日（火）
飛行機の遅れで、20時半～　ホテル着
夕食（3階宴会場）後、チェックイン

10月30日（水）
7時～　朝食
8時半～　貴州国際山地観光とアウトドアスポーツ開会式
12時～　ホテルに戻って昼食
13時半～団長打ち合わせ
14時半～開会式（1階・光明ホール）
司会と挨拶
中國テレビ芸術家協会副主席・廖猟事務総長
　文明は多様さをもとに交流し、交流をもとにお互いに鑑賞し合い、それによってお互いに発展していきます。文明と文化の多様性、様々な生活の記録、輝く命と美しい文明は多くの映画やテレビ作品の中に現わされています。中国の皆は日韓のテレビの同志と一緒に努力することを望み、引き続き交流を深め、文明をお互いに促進します。友好と開放の精神をもって、共にアジアのテレビの交流と協力を推進し、美しい未来を作りたいと希望します。

挨拶
貴州省全人代常務委員会・何力副主任
貴州省黔西南州州委常務委員・范華宣伝部長
日韓中3か国協力事務所・曹静副事務総長
韓国プロデューサー連合・アン・スヨン会長
　アジアの星・韓国、中国そして日本の3国の制作者はお互いの理解を深め、共に友情を築くために集まりました。これまで19年が経ちました。この間、各国の情勢が変化し、国際関係も平穏ではありませんが、私たちは諦めたことはありません。私たちに続いている真心と友情を誇りに思っています。韓国には「10年で山河も変わる」という言葉があります。私たちの友情も次第に変わって行くのでしょうが、未来のいかなる困難も私たち制作者の繋がりを断つことはできないと信じます。
　今年は「多彩・多元、アジアの多様性」がテーマで、この美しい貴州省興義に集まりました。韓国の全制作者を代表して中國電視芸術家協会、貴州省南西部の関係者のみなさんにこの空気がきれいで景色秀麗な観光地にお招きいただいたことを感謝します。
日本放送人の会・河野尚行監事
　日本代表団を代表して挨拶を致します。
　私は興義の街へ来るまで、東京から上海まで3時間、上海から興義まで4時間、上海で4時間以上待ちましたので都合12時間ほどかかりました。その間、このフォーラムのテーマである「多彩で多元的なアジア文明の多様性」とは何かと考えていました。経済が発展すると世界中何処の都市へ行っても高層ビルが立ち並び、郊外には高層マンションが

立ち並ぶ。豊かになることは喜ばしいことだが、なにか画一化されて味気ないという気もします。この興義の街にも高層ビルが建ち高層マンションが建っていますが、郊外へ出ると自然の豊かさ、生活文化の豊かさ、多様性があります。一年を通しての生活はそんなに画一化されるものではない。この貴州省には34の民族があるとのことですが、それだけ多くの固有の文化がある。何千年もかけて培ってきた生活様式、文化は簡単に失われるものではない。われわれテレビ制作者は、世界の人々の喜びや悲しみ、葛藤を描くことが仕事ですが、その一方で自然の豊かさ、人々の生活の多様性に目を向け、世界には様々な自然の豊かさとさまざまな人間の暮らしがあるということを描くことも大事です。今回の「多彩で多様なアジア文明の多様性を守る」というテーマは実に適切です。

これから3日間、単なるツーリズムやアミューズメントでなく、人間の生活の豊かさを味わいつつ、われわれテレビ制作者がさらに豊かな表現ができるよう、討論を重ねたいと思います。

ありがとうございました。

開会の辞

中國文学芸術界連合会・胡占凡副主席

15時半～　作品視聴と討論

中國バラエティー「中国詩歌大会」

中華の優れた詩、詞の魅力を際立たせることを趣旨とし、有名な文化学者5名をコメンテーターに見る人の知識、趣味、鑑賞を満足させた。２０１９年春節の期間に10日間連続放送。「詩が普通の百姓家に入る」「詩で春節を過ごす」を実現した。

制作者・顔芳（中央電視台教育チャンネル勤務）

17時10分～作品視聴と討論

日本ドキュメンタリー「移住50年目の乗船名簿」

１９６８年、南米行きの一隻の移住船に乗り込んだ人々の人生を描いた群像ドキュメンタリー「乗船名簿ＡＲ29」が制作された。そのご、ディレクターは10年、20年、31年後に移住者を訪ね、その都度人生の変遷を放送。そして、50年後の昨年、５回目の南米撮影を行い、移住者たちの半世紀を４時間半の４Ｋ番組にまとめた。今回の59分「特別編集版」は、ジャングルに理想郷を作ろうとした一人の野心家と、彼の夢を引き継いだ子孫の物語を中心にまとめた。

制作者・相田洋（１９６０年ＮＨＫ入局。定年退職後83歳の現在までフリーランスとして番組を制作し続けている）

19時～　　歓迎パーティー

10月31日（木）

7時～　朝食

8時～　作品視聴と討論

中國ドラマ「砕氷行動」

２０１３年広東省公安機関が展開した「雷総毒行動」という具体的な事例を素材に、公安機関が出動して薬物犯罪を除き、社会の安全を守る強い意志と非凡な能力を描くドラマ。監督・傅東育、劉璋牧

制作者・楊梓（北京愛科学技術有限公司自作劇開発センター執行プロデューサー）

9時40分～作品視聴と討論

日本バラエティー「コッコデショ」

太鼓山・コッコデショは長崎の秋の伝統行事・長崎くんちの出し物の中で高い人気を誇る。伝統と技は脈々と受け継がれてきたが、時代の移り変わりとともに、太鼓山を奉納する町の姿は変わった。担ぎ手の世代交代が進む中、町を率いる指揮者が掲げた合言葉は「結束」。町がひとつになって迎えた、平成最後の宝船の船出。稽古する男たちの挑戦を追った。

制作者・佐藤有華（２０１５年テレビ長崎入社。警察担当を経て現在市政担当記者）

11時20分～作品視聴と討論

韓国ドラマ「私の後ろにテリウス」

長期間姿を消していた伝説の黒衣の要員金本は、隣に住む女性高愛琳と、諜報戦に身を沈めるのをきっかけに、暗黙のまたは特別の情報協力を運命的に展開する。キングキャッスルアパートを舞台に諜報戦と子育てが同時に展開する。

制作者・パク・サンフン（ＭＢＣドラマＰＤ）

13時～　昼食

14時～作品視聴と討論

韓国ドキュメンタリー「どこにでも存在し、どこにでも見つからないジョン、氏闘と龍賢」

この男、「軍事独裁打倒」と叫んだことがあり、軍の中の死亡事件疑惑を告発したことがあり、三豊デパート崩壊事故救援の現場に立つこともあった。今、彼はいろんな名前を持ったまま、普通の人として生きている。ヒーローでも、偉い人でもなく、自慢することもなく、時代に責任を負って生きてきた。彼こそ大韓民国の真の主人公なのだ。

制作者・イクンビョル（ＳＢＳ・ＰＤ）

15時40分～作品視聴と討論

日本ドラマ「チャンネルはそのまま」

物語の主人公は北海道ホシテレビの新人記者・雪丸花子。同期の仲間は着実に成長しているが彼女は失敗ばかり。そんな花子が次々に起こす騒動に周囲はいつも振り回されるが、なぜか彼女の周りではスクープが発生し、感動が沸き上がる。彼女の活躍を「報道：」と「営業」の対立、ライバル局ひぐまテレビとの情報番組戦争、キー局との緊張関係などを織り交ぜながら、コメディータッチで描く。

制作者・多田健（北海道テレビ、情報番組、バラエティー番組担当。１９９４年ドラマ制作に参加）

17時20分～作品視聴と討論

中國ドキュメンタリー「粤劇の香り」

広東劇の伝承と伝播をテーマに、広東劇の欧凱明を主役として、彼の40周年の芸術特別工業のリハーサルと演出過程を記録。広東劇の40年間の広州、香港、海外の経歴を回顧し、広東劇の魅力を表現している。

制作者・廬川（映画監督）

19時～　夕食

20時30分～作品視聴と討論

韓国バラエティー「こんにちは」（アンニョンハセヨ）

同時代に生きる近所の人達を主人公に、彼らの周りに起きたことを述べる番組。家族、友達、上司あるいは夫婦をポイントに、社会の中で起きたトラブルに２００名の現場の観衆とゲストが耳を傾け、個人的な経験を分かち合って共鳴を求める。主人公の悩みは私たちの悩みでもある。社会の中での様々な矛盾、トラブルを避け、社会の雰囲気の改善に交流します。

制作者・オヒョンスク（ＫＢＳ）ソン・スヒ（ＫＢＳ）

11月1日（金）

7時～　朝食

8時半～　テーマフォーラム

ニューメディアのテレビ番組の発展

（1国2人ずつ、1人10分）

10時半～　閉会式

司会　曹曦貴州電視台副台長

参加作品への講評

ドラマ　菅野高至日本放送人の会理事

はじめに総論です。今回上映された日韓中のドラマは、それぞれの地域の社会的背景、文明や文化を巧みに取り入れた豊かなドラマを、各国それぞれが提示していました。そして、なぜか偶然に、『組織のありようを考える』ドラマが揃いました。

では、各論です。最初に、中国の『砕氷行動』42分・全48話です。広東省の麻薬取り締まりの実態を描いたドキュメンタルなドラマです。何よりも感心したのは、脚本づくりに時間をかけたという点です。様々な分野の１００人以上の人々を取材し、脚本完成までに３年間を要したとの話は、改めて脚本づくりの大切さを教えてくれるドラマでした。

それともう一つ。放送にはキャンペーンという役割があります。日本では、少し前に３・１１の東日本大震災がありました。そのとき以来、キャンペーン番組が今も多様な方法で続いています。復興への様々な課題を取り上げるバラエティーやドキュメンタリー、ドラマが作られています。

中国で、麻薬撲滅のキャンペーンのために、サスペンスの要素を取り込んだエンターテイメントドラマを作る、これは新しい試みだと私は感心しました。

ヤンズ（楊梓）プロデューサーは、体系的にシステマティックに制作しているとのことですが、お話から想像するに、スタッフ・キャストすべての人々を、チームとして引っ張って行って作品を完成させる、プロデューサーの力の大きさとその熱量の強さに、大いに感動しました。

作品の内容は、（人と人との）人間の葛藤、家族内や組織内での葛藤を描いたもので、警察庁・行政庁・検察庁、それぞれが腐敗の構造を持っているのを、ヒーローが成敗して行くというもので、全48話、見事に作り込まれたドラマであると思いました。

次に、韓国の『私の後ろにテリウス』（英題My Secret Teriusu）60分・全16話、ＭＢＣ文化放送の作品です。サスペンスとコメディーを掛け合わせた「諜報コメディー」という新しい地平に挑戦したドラマでした。一緒には存在できない「育児ママ」と「特殊工作員」。この二つをまず設定して、それを結びつけると、どんな化学反応を起こすのか、と考えて作られたドラマです。コメディーをベースにしたことで、サスペンスの新たな地平を切り開いたものだと感じました。

パク・プロデューサーによれば、ターゲットは30代～40代の女性。世界的な「me too」運動、チョ・ナムジュ著『82年生まれ、キム・ジョン』がベストセーラーになるなどの「主婦の反乱・反撃」の社会的背景をドラマに盛り込んで、女性を魅力的に描いたものです。「専業主婦にも、夫に負けないちゃんとした役割があるのだ！」という、男性には耳の痛いお話でありました。

ヒロイン役の女優の笑いを取るタイミングは素晴らしいものがあり、女優の演技力に感動しました。また、それを引き出した監督の演出力も見事なものです。この作品を、一言で言うと、やはり「プロの仕事でした！」、韓国のドラマづくりの素晴らしさは、「アジアで一番！」です。

三作目は、日本の『チャンネルはそのまま！』北海道放送という小さな放送局が作った、30分・全5回の、小さな作品です。小さいながらも、制作には少し歳月のかかった作品です。

今から9年前に、自分たち自身・北海道放送を取材させて、原作のコミック連載を作り、それをベースにドラマ化して、開局50年記念番組として本年3月に五夜連続で放送したものです。組織の新陳代謝には、はみ出し者・バカが必要だという社長命令で採用した結果、女性・新人記者が騒動を起こして組織を動かしてしまうのを面白おかしくコメディータッチで描いている。会場で上映されなかったのですが、第4回と最終回では、報道のありようについて物語は展開します。犯罪の被害者と加害者の人権を、どう守るのか、被害者・加害者にあらゆるメディアが集中してドーッと押し寄せる、「一極集中報道（メディアスクラム）」をどう乗り越えるかということも、このドラマでは「新人バカ」が挑戦して見せてくれます。

何も考えずに行動した彼女は、結果、立て籠もり犯人とのインタビュー独占生中継に成功するというお伽噺のようなコメディーですが、報道のありようと放送局がもつ社会的使命を、全社挙げて自分たちでドラマを手作りして放送したことに、心から敬意を表します。

以上、三つの作品は、最初にも申しましたが、日中韓、それぞれの地域の文化文明、社会的背景を巧みに取り込んで、多彩で豊かな人間ドラマを構築しました。テーマは、組織と個人のありようから、人間への愛の眼差しへと、素晴らしい作品を見せて頂きました。

そして、ドラマを支えるのは「脚本づくり」です。脚本を作るには、プロデューサー・ディレクター、会場にお集まりの皆さま方、それぞれの力が何よりも大切です。様々なメディアを使い、作られたドラマは外へと出て行きますが、時間をかけて丁寧に取材し、脚本を巧みに作り上げるのもプロデューサー・ディレクターの力、そのものです。今後とも、アジアの中で日韓中のプロデューサー・ディレクターは良きライバルとして、ともに切磋琢磨して、優れたドラマを作って行きましょう。

参加作品への講評

ドキュメンタリー　中國

バラエティー　韓国

表彰式

記念カップを贈呈

閉会挨拶

貴州省文学芸術連合会楊暁曼党組書記・副主席

日本放送人の会河野尚行監事

まず、この大会を見事に成功させてくれた多くのスタッフの皆さん、舞台で、舞台裏で働いた皆さん、関係者の皆さんを含めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

私は、興義市に来たのは初めてですが、時間がたつにつれ、このフォーラムの印象はますます強くなって行くと思います。

中国に比べると小さな日本列島ですが、この１５０年ほどの間に凄いスピードで均一化が進みました。しかし学校で教える標準の共通語の他に、地域ごとに親が子どもに教え、次の世代が次の世代に教える地域の言葉、方言が生きており、それがかろうじて地域文化の多様性を守ってきました。それにくらべ中国大陸は地域の個性的で多様な文化が残り、少数民族も立派にその生活様式を守っています。中国がこれから経済発展を遂げる中でも、この地域の個性、文化を守ってもらいたい。その上でユナイテッド・オブ・グレートチャイナに発展して貰いたいと思います。メディアの仕事は、いくらメディアがいろんな形で進歩しようとも、人間の多様性、人間の豊かさ、自然の豊かさが対象です。是非、中国は地域の個性を大切にしながら発展してもらいたい。私も日本列島に帰って、今回のフォーラムの多彩で多元的な文化をどう守るかを頭に置いて仕事をしたいと思います。

ありがとうございました。

閉会挨拶

韓国プロデューサー連合アンスヨン会長
閉会の辞
中國テレビ芸術家協会高健副事務総長

12時～　昼食会（中日韓協力事務局）
14時～　万峰林（観光（希望者のみ）
18時～　夕食

11月2日（土）帰国

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日本からの参加者

河野尚行、音好宏、相田洋、矢吹寿秀、多田健、渡辺紘史、近藤邦勝、菅野高至、柏木登、深尾隆一、村上雅通、寒河江正、下崎寛、後藤和晃、曽根英二、中﨑清栄、辻本昌平、牧之瀬恵子、沈霄虹、西村陸生、沼田百合子、鈴木祥吾

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

参加者の感想・意見

（前回までの参加者を含む）

場面の意図が観客に伝わった

相田洋

19回目の日中韓3か国放送フォーラムは令和元年10月30日から11月1日までの4日間、中国貴州省興義市の大きなホテルの宴会場で行われた。会場中央に設置された3基のモニターは、快晴の屋外に設置しても、映し出される映像が青空にも負けないLEDパネル。その大きさは縦4mで横6m。これが正面に横一列に3基並んでいた。そこに映し出される映像は眼がくらむばかりに明るく鮮明で、サウンドは迫力と繊細さを兼ね備えていた。中央のモニターには出品作品がオリジナルのままに映し出され、両脇のモニター画面下には、ナレーションや証言が出品国以外の言語に翻訳されてダブった。中央に日本の作品が上映される時は、右側の画面下に韓国語の文章がダブり、左側の画面に中国語が流れた。日中韓200人のテレビ屋達は、自国語の画面を凝視した。私の制作した「移住50年目の乗船名簿・特別編・伊藤一族の50年」が3面のモニターに登場した時は、その巨大さと鮮明さに仰天した。59分の上映が終わると会場が拍手に包まれた。二面のモニターに流れた中国語と韓国語が雰囲気を含めて、場面場面の意図を観客に充分伝えてくれたらしい。思えばこのような体験は生涯で初めてのことであった。ドキュメンタリーのような番組は、放送が進行している間に、受け手の息づかいや表情をリアルタイムで感じることは出来ない。放送が終わるとディレクターは、活字メディアに載っていないかと、評論記事や読者評を、眼を皿にして探す。しかも、どんなに苦労して生み出した番組も、放送が終わった瞬間に命を終える。それに比べて、映画監督は劇場で観客の反応を自分の耳目で確かめることができ、時には観客と対話することさえ出来る。しかも、名作は長く命脈を保ち、時間が経過したあとも、人が観てくれる。なんと羨ましいことか。そんなこともあって、会場の反応に耳をそばだてながら、この催事に参加できた幸せを感じ、会場に拍手がわき上がった時は「手塩にかけて育てた我が子が褒められた」ように嬉しく誇らしかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

相田さん・李さんの通訳

大園百合子

放送文化基金は、組織の枠を越えた制作者同士の自由な交流の場を設けようと、日本の各地区で組織された実行委員会との共催で、「制作者フォーラム」を実施している。

2000年3月、熊本で開かれた九州放送映像祭&制作者フォーラムにおいて、出演者であった韓国のドキュメンタリー監督・鄭秀雄さんが、「ぜひ、韓国の制作者を交えたフォーラムもやりましょう！」と発言し、有志制作者の方々がそれを実現させたのが2001年、関釜フェリー上での第1回日韓制作者フォーラムだった。

私は対馬での第2回フォーラムに参加したが、日韓の現場の制作者たちが車座になり、夜を明かして制作者談義を繰り広げた熱気を今も鮮明に記憶している。そのフォーラムも中国を交え19回目を迎えることができたのは、放送人の会の皆様のご苦労あってのこと。ここに深い敬意を表したい。

今回の興義でのフォーラムは、中国開催であるだけに、やや政治的イベントの色合いが濃かったが、その中でも、個々の制作者同士の交流は会場の其処彼処で着実に行われていたのではないか。その一例を目の当たりにした。ドキュメンタリー作品を出品していた韓国の李クンビョルさん（SBS）から、相田さんに是非話をしたいと頼まれ、私が拙い通訳で仲介することになった。李さんの作品は、韓国のある民主化運動の闘士を描いており、その後の取材で、この主人公が南米の井戸掘りのボランティアをしていたことがわかったという。そこで、南米への移住者を取材した「移住50年目の乗船名簿」を出品した相田さんに、南米取材のアドバイスを受けたいとのことだった。相田さんは快くパラグアイ在住のコーディネーターを紹介し、若い李さんのこれまでの健闘を称えた。李さんも伝説のドキュメンタリストからの激励に感無量だと感謝していた。私が偶然にも目撃した国も世代も越えた二人の熱い握手は、このフォーラム開催の意義を十分に感じさせるものだった。（放送文化基金）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日韓中近くて遠く秋深し

荻野慶人

平成17年10月21日、明治神宮外苑の旧日本青年館国際ホールは第5回「日韓中テレビ制作者フォーラム」の開幕数分前、放送人の会の磯村健一さんや山田尚さんなどが裏方スタッフに手振り身振りの指示で熱をこめる。

大山勝美組織委員長の開会宣言に始まり、鄭英雄さん（韓）の経緯説明、村上光一さん（日）、崔彰鳳さん（韓）、李興国さん（中）の祝辞が続き、委員の志賀信夫さんや特別講演の辻井喬さんなど既に鬼籍にある方々の肉声が懐かしい。司会は露木茂さんで、松尾羊一さんや長沼士朗さんなどが熱心にノートする場内を、カメラのシャッターを切りながら泳ぐ伊藤雅浩さんが目立つ。

歓迎の宴での乾杯の発声は川口幹夫さん、そのおもてなし冗句は、宴会は同時ではない別々の通訳なので通じたり通じなかったり。

作品鑑賞は各国語別に分散して、制作者や演出者を交え深夜まで感動を共有した。

かように日本（放送人の会）が初めて主催したのは14年前で、今年86歳の私が仔細に憶えているわけではなく、DVDを久しぶりに再生してみたのだ。小型DVカメラの撮影編集を始めたばかりで腕が鳴る私は、当会には撮影班がないのでこの大イベントの記録係を志願したのだった。

会場のフルショットを撮影しっ放しの固定カメラ、スクリーンと登壇者を狙い時々サイズだけ変えにゆく固定カメラ、私が手持ちであちこち駈け回るカメラの3台で4日間撮りまくった。感動的な、あるいは突発的なハプニングを期待しながら…。同時通訳は卓上のヘ

ッドホーンでしか聴けないので、外国語は編集時に確かめた。山田良明さんの「各国ＴＶ事情報告」などの編集は自在だったが、韓国語中国語は難しく音楽の編集に似ていた。

今野勉さんの司会で村上雅通さんや中山和記さんなど各国の現役制作者たちが熱く語り合う「共同制作への模索」をＮＨＫが放送した〈ＢＳフォーラム〉を添えて、約三時間に編集したＤＶＤを14年ぶりに観終えたところで、曖昧な記憶が鮮やかに甦ってきた。

政治的経済的に火種の燻る現況だけに、事由はあるにせよ、フォーラムから当会が撤退をせざるを得なくなったことを口惜しく思う。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

深いことを面白く…先輩放送人に学ぶ旅

柏木 登

日中韓フォーラムこれが最後の機会となると、三ヶ国の放送人が各国の番組を同じ場所で見、意見交換する貴重な機会だということを改めて実感する。今回の参加作品は前回に続いて粒ぞろい。特にドキュメンタリー部門は構成・映像表現に優れた力作が揃った。韓国の作品は、7年前に「里山に暮す奇人変人」として取材した愉快な男の知られざる過去が次第に明かされてゆく構成と視点が見事。民主化運動に身を投じ、社会正義のために闘っても、常に市井の人として偉ぶらず生きた男の姿が心を打つ。担当者は「現政権にもみられる様に、民主化運動に参加したと自分から自慢げに言う人は偽物が多い。他人のために闘い続け、ずっと普通の人として生きている者こそ韓国の誇るべき主人公だ。」と言った。

日本代表は相田洋さんの大河ドキュメンタリー「移住50年目の乗船名簿」。小生は、過日のＢＳ放送90分×３回ＯＡ全て見た。地上波60分版放送も見た。50年に亘る取材なので、今フォーラム公開60分版で長期取材の重さやそれぞれの人生が伝わるかと懸念したが杞憂だった。質問や感想がみな好意的で、相田さんは夕食時にも中韓の若い記者やディレクターに囲まれていた。

小生も新人テレビマンとして日本テレビで番組制作に携わっていた頃、ＮＨＫ特集「電子立国」や「核戦争後の地球」を観て、本当に感銘を受けたものだ。その相田洋さんと一緒に旅が出来たことは個人的には今回一番の出来事。「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを面白く、面白いことを真面目に…」若きＡＤとして、井上ひさしさんや永六輔さんから教えられたことは、相田さんの作品そのものだな…と当時感じたことを思い出した。ディレクターが画面に出て三宅アナウンサーと実に自由闊達に喋る進行も当時は珍しく、感心したものだ。

今回の旅はそんな憧れの先輩とご一緒出来る機会でもあり、バスの中でも夜中の深尾バーでも話が伺える貴重な時間だった。80歳を過ぎても本当にエネルギッシュでお喋りも面白く…全く止まらない。フォーラム中「腕力・忍耐力がないと60年間ディレクターは出来ない。」という発言があったが、加えれば、人間的な大らかさ・純真さが芯にあるから…と思い至った。これは、今なお現役の中崎さん、村上さんにも通ずるように思う。

その中崎清栄さん、村上雅道さんなど地方局で今なお活躍される作り手とお話し出来たことも今回の収穫。ＨＴＢの多田健さんのドラマ「チャンネルはそのまま」も噂には聞いていたが、この機会に初めて観ることが出来た。実に創意に満ちて楽しい。多田さんは帰途の会話で大学の後輩ということも判明した。チャーミングで優秀…素敵な後輩が出来た。

貴州省での催しに参加出来るか直前まで迷ったが、参加して良かった。

最後に世話人の深尾さん、渡辺さんに心より感謝します！本当にご苦労さまでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

蘇る中國無錫大会

工藤 英博

日韓中テレビフォーラムが終焉を迎えて、思い出に残るのは２０１３年の無錫大会。

中國への旅は30年ほど前に仕事先から招待され、イギリス客船で神戸港から大連、北京、天津などを久野浩平さん、橋本潔さんと悠長な船旅をして以来、実に久し振りだった。

無錫市は改革開放以来、急速に工業が発展し、日本企業の進出も多く、自然環境にも恵まれた物産豊かな古都である。

初日、宿舎のホテルの晩餐会で手厚くもてなしを受けた後、近くの開会式場へ向かった。暮れなずむ街路樹沿いを少し歩くと他を圧するように聳えたつ無錫電視台ビルが忽然と現れた。外観があのお台場のフジテレビによく似ているのには驚かされた。その巨大ビジョンからはフォーラムを歓迎する色とりどりの映像がくり返し夜空に写し出されていた。無錫テレビ局内も見学したが、すべて中国製の新鋭機材や編集システムがずらりと並ぶ。しかし、放送中にもかかわらず人の姿も疎らで、局内は不気味なくらい静まり返っていたのが印象に残っている。

日本から出品した作品では「希望の星」が注目を集めた。植民地時代に北朝鮮の中学同級生だったにほんじんの寒河江正氏と朝鮮人の羅逸星氏は友情を育むが終戦で離別。41年ぶりに劇的な再会を果たし、二人は寒河江氏が所属する合唱団のソウル公演を実現する。音楽という共通言語で人間としての真の信頼関係が築かれ、民間での日韓文化交流が続いている…。実話を神奈川テレビとＫＢＳが共同制作したドキュメンタリードラマで、大山勝美さんが総監督を務めた。

だが、この作品はいまだに韓国で放送されていない。その要因は諸説あるのだが、日韓の複雑な緊張関係の中、歴史の連鎖に次世代を巻き込まないためにも、ひとりひとりが個人的な友情を継続させおたがいの信頼関係が深まることを大切にしたい現在、残念に思う。

また、敢えて普遍性あるテーマを掲げ、共同制作に立ちはだかる様々な困難を乗り切って完成させただけに惜しまれる。

閉幕式で中国芸術家協会の王占海さんが「我々はこの会議の発展に尽力された牛山純一さん、大山勝美さんの恩恵を忘れてはならない」と締め括った挨拶に感動を覚えた。

共産党一党独裁の矛盾の影をかいま見る時もあったが、無錫大会は終始運営が円滑に運び、中国側は日本の我々に暖かい心遣いを示してくれた。

主催者からお土産に頂いた一対の「恵山泥人形」が我家の書斎で無邪気に微笑んでいる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フォーラム最終回に参加して

河野 尚行

どの大会も運営資金の捻出に苦労すると見え、今回の中国興義大会は、国際山地観光及びアウトドア大会の一環として開催された。まず初めに我々は、万峰林の山々を望む郊外の高台に設置されたテント張りの野外舞台での全体会議に参列することになった。少数民族ミャオ族の衣装で身を飾った美人モデル達が

見守る中、開会式が始まった。日本語の通訳なしにフランス語、ロシア語、英語の挨拶が続き、特に中国語の長い挨拶が5，6人も続くと、万峰林の手前の田園に浮かぶ熱気球の演出をぼんやり眺めているだけであった。

後で気づくのだが、この万峰林の山麓一帯にはブイ族、ミャオ族を中心にする多くの少数民族の集落が拡がり、隣のベトナムの山岳民族にも通ずる独自の生活様式を保っていて、今回のフォーラムのテーマ「多彩で多元的なアジア文明の多様性を守る」にはふさわしい場所であり、午後からクラウンホテルで始まった3日間のフォーラムの本番は、充実したものになった。

特に、冒頭の相田洋さんの「移住50年目の乗船名簿」の反響が大きかった。韓国、中国から参加の若手の現役制作者の多くは、一つのテーマを50年間も追い続け、異国の環境の中で繰り広げられる人生と3世代に及ぶ人間模様を描き切ったドキュメンタリーの制作者に対する興味と敬意が感じられた。若い女性3人（女性記者と2人の通訳）に長時間取り囲まれた光景と、自分も南米に取材に出かけたいという韓国男性が相田さんに熱心に質問している姿は印象的であった。

韓国の多彩な人生を生きた活動家を取りあげた番組には強い興味を持ったが、文字スーパーのテンポが速く、動体視力が衰えた年寄りにはもう一つ理解が及ばなかった。3国の才覚豊かなドラマについては菅野さんのコメントをじっくり味わうことにしよう。

フォーラムの最後は新しい技術とTV番組制作についての報告だったが、「移住50年目の乗船名簿」は、6×4サイズの白黒、次いでカラー、ハイビジョン、4Kで撮影されており、4Kでの夕景の美しさと人間の表情と発言は細やかではあったが、目の粗い50年前の白黒が記録した東北の開拓地の映像も、それに劣らずの人の気持ちを打つ迫力がある。

技術の進歩は、速度や情報の量、ビジネスの広がりと大衆化、科学的な発見には貢献していくだろうが、必ずしも番組の深化にはつながらない、のではないかとも思う。

19回に及ぶ日・韓・中フォーラムに私は15回ほど参加してきた。中国の、国家を背負った大作主義、日本の植民地時代への韓国若者の過敏な反応など、意見交換や議論が必ずしもうまくかみ合わない点が多々あったが、にも拘らず、歴史的にも地理的にも隣接する日・韓・中3国のTV制作者の会議の意義は人の繋がりを含め十分あったと確信する。

このフォーラムでお馴染みの王占海さんは演説口調の中国人が多い中で中国の番組を簡潔に巧みに紹介し、黄有福教授は中国と韓国との同時通訳の仕事まで買って出ていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フォーラム興義大会メモ

後藤和晃

中国、韓国の作品については、他の人たちにまかせ、私は日本の2作品についてリポートします。

「移住50年目の乗船名簿」

この作品は元NHKのプロデューサー相田洋氏が、50年前に移民船で南米に渡った一家の開拓史を10年ごとに記録し続けた力作。取材対象とした一家の初代は、旧満州からの引揚者。東北の一隅の開拓で一定の成果は得たものの、さらなる理想郷を求め南米に渡った。番組は一開拓者の夢を、その子や孫をはじめ、一族の人たちが引き継ぎ、農地の開拓にとどまらず、大きな学校を開くなど現地の人々と共生している姿を描いて感動的だった。

取材者の相田兄も、旧満州から過酷な体験を重ねながら引揚げてきた人と聞く。「50年目の乗船名簿」は、満州への夢を南米で実現しようとした開拓者たちへの相田兄の愛情と共感に溢れた不世出の応援歌だと感じた。

「コッコデショ　平成最後の宝船」

全社員わずか80名ほどのテレビ長崎の若い女性記者が製作した完成度が高い作品。

この番組は、長崎の秋祭り〝長崎くんち〟の出し物の一つ〝太鼓山〟と呼ばれる山車にスポットをあて、山車の担ぎ方の様式美と、山車に関わる人間たちの美意識を見事に描いた佳作だった。太鼓山は、40人の男で担ぐ御輿だが重さは1トンにもなる。その御輿を男たちが、かけ声もろとも両手で空高く投げ上げ、落ちてくる所を片手だけではっしと受け止めるのだ。

空に舞った御輿が、男たちの片腕の上に一瞬にして静止する様は、歌舞伎役者が見得を切る如くで盛大な歓声がまき起こる。この技を体得するまでの期間は、なんと3ヶ月という。御輿の様式美を支えている男たち（太鼓打つ子ども含め）の祭りにかけた美意識も尋常なものではないように思えた。

今、日本各地で永い間受け継がれてきた人の絆や地域の文化が、急速に消えてきている。そんな中でも太鼓山の関係者が、典型的な日本人の和と美意識を持ち続け、7年に1度の祭りを守っていることがよく理解できた。

80人しかいない小さな局で、祭りの日の太鼓山の人々の多彩な表情を、みごとに取材しているのには感動を覚えた。

最後にひとこと、つけ加えます。

日中韓3ヶ国のフォーラムは、30～40代の各局の若手がぜひ参加し、他国の番組に触れるだけでなく、ディレクター達との交流にチャレンジして欲しいと思います。フォーラムが始まったころ、まさしく、そんな交流があり他国のディレクター達と街の居酒屋にくり出したこともありました。ぜひ、作品にも語学力にも自信のある若手が参加するよう配慮して頂きたいと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「中國詩歌大会・CCTV」

近藤邦勝

この93分の番組は中国の春節に10日間連続でOAされ、「詩が普通な百姓家に入り…詩で春節を過ごす」ということを実現した、とある。今回は2019年版・第4期を拝見。

「国破山河在、城春草木深」という杜甫の詩を「夏草や兵（つわもの）共が夢の跡」と芭蕉が詠み直している。現在俳句ブームともいわれ日本のTV番組でも人気を博している。一方、中国では古典詩詞をそのまんま、クイズ形式にしたりして番組化し、高視聴率（1・2%）を得ているという。詩経からざっと3千年以上、毛沢東も詩を詠んでいる。征服王朝時も詩詞は作られている。それら膨大な量の詩詞をどれだけ記憶、精通しているかを競うエンターテインメント番組！驚愕した！しかも前回の優勝者はデリバリーの仕事をしている中年のオジさん。眠狂四郎の柴田錬三郎さんが衛生兵として乗った南方派遣船が撃沈され7日間海上を漂流して奇跡的に助かった。彼はその間、北宋の詩を吟じ続けたという。こんな日本人は極稀れである。高校の漢文の授業で暗記させられた有名詩ならともかく13歳の少女が曹操の「観滄海」までそらんじている。なんかNHKののど自慢の大型版みたいな気軽さで展開する。題材は原石ともいえる漢詩そのもの。日本の詩歌・韻文が万葉集あたりを嚆矢とするとして、日本の現代の少年少女からおじさん、おばさんまで原文で提示したら…殆どチンプンカンプンだろう。中国の詩詞の

伝承は全く変遷することなく、現代まで生きている―というしかないだろう。中国の恐るべき一面を見せつけられたような気がした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シニア世代からの伝言
日中韓のフォーラムは引き続き継続を　～新たな出発を目指して

寒河江正

現地少数派民族・ブイ族（民族衣装を身に着けまだあどけなさが残る美女集団）の笑顔と会期中、裏方の暖かいおもてなしを受けて4日間の大会は無事終了した。滞在中、中国の味も堪能出来た。最終日は2万の数を超す小高い山々の繋がる「万峰林」を観光。圧巻の絶景に自分の立ち位置を忘れそうになった。先ずはお世話になった関係者の皆様にお礼を申しあげたい。

この大会の魅力は登壇するテレビ制作者（プロデューサー・ディレクター）の生きる姿勢だ。心を打つ作品には自分と向き合う弾ける言葉がある。今回私は「移住50年目の乗船名簿」のディレクター相田洋さん83歳のＮＨＫの作品に感動した。人生を達観した様相はがっちりした身体にあるが、放つ言葉は夢見る少年であった。美しい未来を創造する制作者の集いで感じたこと、若いプロデューサー・ディレクター達の参加が今後の課題である。フォーラムは今回の第19回で正式に終了と伺った。多文化に生きる若者達の交流は是非継続して欲しいものだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

―この項は写真ページの解説でもあります―

撮影日記風『フォーラム雑感』

菅野高至

10月某日　興義出発の一週間ほど前に、ＪＲ八王子駅に隣接するテナントビル「八王子オーパ」の3階、TSUTAYAの中のStarbucksで伊藤編集長から鞄ごと、カメラと交換レンズを預かる。遠すぎて行けない編集長に替わって、フォーラムの写真を撮るハメになったのだ。鞄は、ずしりと重い。

思えば、他人様にお見せする写真を撮るのは、なんと！『四十四、五年ぶり!!』だ。1970年代、放送部（ＮＨＫ山口）備えつけのアサヒペンタックス（1眼レフカメラ）で、自分で写真を撮って、スチール構成を作って以来のことになる。最初はモノクロだった。そして、余りに備品のカメラがボロいので、入局2年目の夏、ボーナスで自動絞りのペンタックスを買ってしまい、連れ合いが怒って・・・!!

10月28日　出発準備。借用のカメラの使い方、多機能過ぎて、仕様書は理解不能で、エイヤッと覚悟する・・・ファインダー使用で自動絞り、手ぶれと画角と水平だけ気をつけて撮る、フラッシュは可能な限り使わない、と。

10月29日　上海空港。①（出発、興義へ）上海までは、羽田の出発が遅れ、しかも前線に沿ったのか、よく揺れた。座り続けて、食事が2回。さらに、興義まで機内で夕食。まさに、ブロイラー状態！

興義空港着。②（20時30分着、ホテルへ）皇冠ホテルでは、チェックインせず、荷物を持ったまま、ホテルの食堂へ。本日4回目のおいしい食事。出発前の一週間の減量が、今日1日で吹っ飛ぶ！

10月30日　6時30分起床。朝食後、バスで万峰林室外広場へ向かう。先導のパトカー付き。バスもサイレンを鳴らす。駐車場から会場まで、各地のミャオ族の踊りで歓迎される。③（歓迎の踊り、会場近くから麓を望む、会場へ向かう会員たち。）

後で分かるのだが、「貴州省国際山間地アウトドアスポーツ大会開会式」の観客エキストラだった。エキストラでも、大きな座席表（32㌢×46㌢）には各自の名前がある。④（座席表）中国共産党の全人代も、こんな座席表があるかもと妄想。一同、『中国を実感！』

⑤（式典を待つ会員、歓迎の踊り）歓迎の踊りの後、演説が始まるが、座席の同時通訳の受信機はロシア語、フランス語、英語のみ。長い演説をただただ我慢。されど、少し寒し。

予定より遅れてホテルへ戻る。帰路、寒さで寒河江さん体調を崩し、深尾さんの機転で、ＶＩＰ待遇の河野さんの送迎車に同乗して帰る。ここで、皇冠ホテルとその街並みを紹介する。⑥（ホテル実景、街並み、興義気象庁など）

14時30分開始予定の開会式、やっぱり遅れて始まる。⑦（開会式全景、司会：廖懇（リョウ・ケン）中国テレビ芸術家協会駐会副主席、事務総長、中国代表団団長、挨拶一：貴州省全人代常務委員会、何力副主任、挨拶二：貴州省黔西南（けんせいなん）州州委常務委員会委員、范華（ハン）州委事務総長、挨拶三：中日韓三か国協力事務所、曹静副事務総長、挨拶四：韓国ＰＤ連合会、安（アン・スヨン）会長、挨拶五：日本放送人の会、河野尚行監事、挨拶六：中国文学芸術界連合会、胡占凡副主席、七：寄付金の贈呈、貴州の会社社長・王鑫氏より1千万元（1億5千486万円）が贈られる。社長の名前が「金」3つ、これって本名かしら？

15時30分開始予定の「中国詞歌大会」（中国・バラエティ・93分）上映、やっぱり遅れて始まる。

⑧　司会&報告：王占海・元中国テレビ芸術家協会副事務総長、顔芳（ＣＣＴＶ科学教育チャンネル監督）Ｐ、汪震Ｄ、

17時10分、「移住　50年目の乗船名簿」（日本・ドキュメンタリー・60分）、相田洋Ｄの事前レクチャーがあり、上映後に渡辺紘史・司会、矢吹寿英（ＮＨＫ・ＥＴＶ特集）Ｐも交えて報告。⑨（相田、全景、渡辺、相田、会場の質問者）19時20分、歓迎ディナー（ホテル1階の光明ホール）⑩（ＶＩＰ席ほか数枚）韓国の新聞社から、取材を受ける相田Ｄ。⑪（二人の通訳（韓国⇒中国⇒日本）とカメラマン。）

20時30分、『深尾バー』が開店、長―い一日だった！　⑫（疲れと酔いの一同）

10月31日8時10分、「砕氷行動」（中国・ドラマ・42分）、⑬（全景、楊梓Ｐ、女優チンさん）

9時50分、「コッコデショ～平成最後の宝船～」（日本・バラエティー・49分30秒）、テレビ長崎制作、担当Ｄは入社5年目の制作局報道部・佐藤有華（ゆか）記者、⑭（司会・渡辺、ＤＶＤ参加の佐藤Ｄ、村上雅通が九州のローカル事情を報告）

11時20分、「私の後ろにテリウス」（韓国・ドラマ・60分）ＭＢＣ文化放送、⑮（司会、朴相薫Ｄパク・サンフン、会場より）。昼食休憩後、14時より「どこでも存在し、またどこでも見つけないジョン、氏闘と童賢」（韓国・ドキュメンタリー・67分）ＳＢＳ制作、入社2年目の新人ＰＤのダッチロールのような作品で、解説も長い。⑯（司会、イ・クンピョルＰＤ、会場より）。

15時50分、「チャンネルはそのまま！」（日本・ドラマ・43分）ＨＴＶ北海道テレビ放送制作、⑰（司会・渡辺、多田健Ｐ）。17時20分、「粤劇の香り」（中国・ドキュメンタリー・66分）、司会・何芳六（中国メディア大学テレビ学院院長、中国ドキュメンタリー研究センター副主任）、廬川Ｄ、副主任の解説が長～い！　⑱（司会、監督）。19時30分、夕食休憩。

20時30分、「こんにちは」（韓国・バラエティー・60分）、ＫＢＳ制作。ソン・スヒＰ、オ・ヒョンスクＤ、長い一日の最後は、テンポが速

○二九日・夕方

①上海空港（興義へ）

②夜9時の夕食です。

写真の頁、
お名前は敬称略です。
今年も深尾バーが開店。
店主・深尾とHTB多田

近藤＆村上

（撮影未熟です。御免！）

○十月三〇日

③イベント会場へ

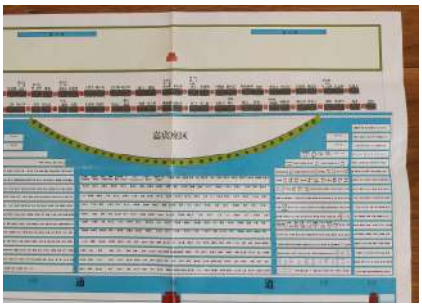
歓迎の踊り

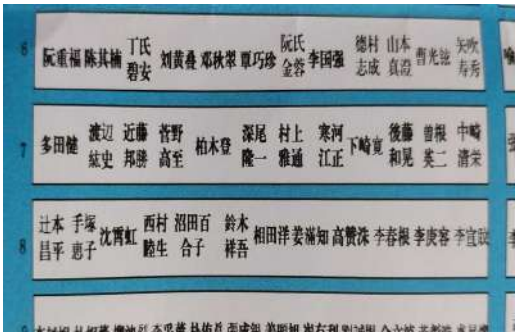
楽隊と寒河江

麓を眺めれば

会場へ。行きはよいよい。

④座席表

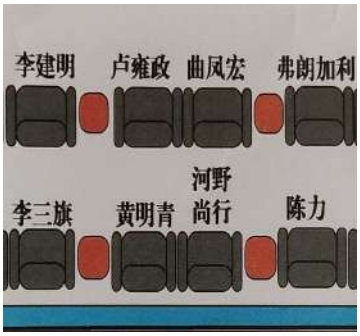




阮重福 陈其楠 丁氏碧安 刘黄爱 邓秋翠 覃巧珍 阮氏金蓉 李国强 德村志成 山本真澄 曹光弦 天吹寿秀

多田健 渡辺紘史 近藤邦勝 菅野高至 柏木登 深尾隆一 村上雅通 寒河江正 下崎宣 後藤和晃 曽根英二 中崎清栄

辻本昌平 手塚恵子 沈霄虹 西村睦生 沼田百合子 鈴木祥吾 相田洋 姜湘知 高贊洙 李春根 李庚客 李宣政



⑤踊り子も観客も寒いよ！

⑥ホテルとその界隈

気象庁と天気予報

（11月1日昼のデーター）

裏通りの八百屋さん

⑦開会式（ホテルの玄関）

司会・膠懇

会場も座席指定。手前より奥へ、日本・中国・韓國

挨拶

何力

ハン華

曹静

中日韓三か国協力事務所

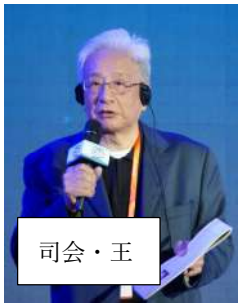
安

河野

胡

寄付金贈呈

⑧「詞歌大会」



⑨「移住　50年目～」上映前に、企画の全体像を相田Dが自ら解説。

会場より

⑩歓迎ディナー

⑪取材を受ける相田D

⑫深尾バー・二日目

○十月三十一日

⑬「砕氷行動」

⑭「コッコデショ〜」

佐藤Dは映像参加

会場より

⑮「私の後ろにテリウス」

⑯「どこでも存在し〜」

会場より

⑰「チャンネルはそのまま！」

会場より

⑱「粤劇の香り」

⑲「こんにちは」

放送文化基金
沼田

オD

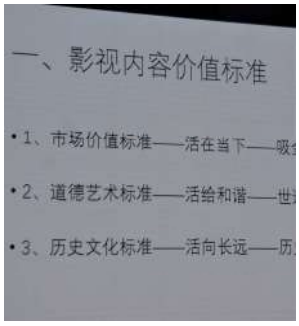
ソンP

⑳深尾バー・三日目

手前が中国、奥に韓国

○十一月一日

㉑フォーラム「ニューメディアとテレビ番組の発展」

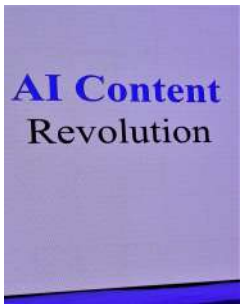


中国・易

司会・楊

日本・矢吹

日本・多田



韓国・A

韓国・B

中国・趙

㉒閉会式

司会・曹

参加作品へのコメント

ドキュメンタリー

中国・何

ドラマ

日本・菅野

㉓表彰式

ドキュメンタリー作品

バラエティー

韓国

ドラマ作品

三部門の記念撮影

左の渡辺が「コッコデショ～」のカップを持っている。

㉔閉会挨拶

中国・楊

日本・河野

韓国・アン

お別れに記念撮影

中国・高

㉕昼食会で

㉖万峰林観光

万峰林の売店にて

⑰夜のお散歩と深尾バー

左隅に、開発のミニチュア

イメージがありました。

深尾バー、最後の夜です。

体力勝負の興義大会でした。

通訳のお二人に、『謝謝！』

○十一月二日
上海甫東空港・午後４時半。

く・明るい視聴者参加の『人生相談』で、うたた寝もせずに楽しく終了。⑲（ソンP、オD、会場の皆さん）。そして『深尾バー』が開店、カメラが重たい。⑳（深尾バーのお客様たち）。

11月1日6時30分起床～朝食。

8時30分～、フォーラム「ニューメディアとテレビ番組の発展」、司会・楊暘（ヨウヨウ・中国テレビ芸術協会ニューメディア委員会副会長、CIBINインターネットテレビ編集組主任、アナウンサー）、各国二人の報告者：易柯明（亡果TV副社長）、矢吹寿秀（NHK・ETV特集P、不詳A（韓国KBS）、多田健（HTB・P）、不詳B（韓国KBS）、趙竜（チョウリュウ・中国メディア大学教授）㉑（易、矢吹、A、多田、B、趙）。

11時30分～、閉会式。司会・曹曦（ソウギ・貴州テレビ台副台長）

一、フォーラム参加作品へのコメント…1・中国側専門家がドキュメンタリーをコメントする・何芳六、2・日本側の専門家がドラマをコメントする・菅野高至、3・韓国側の専門家がバラエティーをコメントする・不詳C。㉒（司会・曹、中国・何、日本・菅野、韓国・C）

二、表彰式…1・ドキュメンタリー作品に記念カップを授与（相田Dは充電のため不在）、2・ドラマ作品に記念カップを授与、3・バラエティ作品に記念カップを授与（韓国KBS二人登壇!!）。

㉓（ドキュメンタリー授与、ドラマ授与、バラエティ授与）

三、閉会挨拶…1・貴州省文学芸術連合会の楊〇曼党組書記・副主席、2・放送人の会の河野尚行監事、韓国PD連合会の安（アン・スヨン）会長「来年は韓国で、お会いしましょう！」、4・中国テレビ芸術家協会の高健副事務総長、㉔（挨拶：楊、河野、安、高、記念撮影：トロフィーを持って他）。

12時30分、昼食会・日中韓三カ国協力事務所主催、㉕（昼食会、名残惜しく記念撮影）。14時20分、万峰林観光へ。㉖（バスの乗場、展望台、山並み、カルスト台地、万峰林の売店、売り場の女たち）。

20時～・夜のお散歩と深尾バー。㉗（お散歩、ビアホール、深尾バー）

11月2日4時起床、4時30分集合、最後まで遅れて、5時10分バスで出発（車中朝飯）。4時間弱バスに揺られて、10時・貴陽市の貴陽龍洞堡空港着。お土産を買う暇も無く、チェックイン。入国帰国ともに、リチウム電池のチェックが厳しい。11時45分、定刻で滑空し、上海浦東空港へ。機内で昼食後、上海着・14時30分。預けた荷物を引き取り移動30分、国際線の発着場へ歩く。荷物を預けてチェックイン、15時30分。Starbucksのコーヒー飲みながら、相田氏の武勇伝を聞く。お土産買って、トイレに行けば、16時20分。しばし待って、搭乗。機内で夕食。21時（日本時間22時）羽田着。

11月3日、なぜか6時起床、シャワー浴びて、体重計に乗れば、美味しい野菜のおかげで、3キロも体重が増えていた!!

【追記】掲載の写真は辻本昌平さん撮影のものを多く使用しています。改めて、御礼申し上げます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

貴州の山々、ミャオ族、ドラマ

鈴木祥吾

この度、第19回日中韓制作者フォーラムに参加するという大変貴重な機会を頂き、ありがとうございます。最初は多少の緊張もありましたが、「放送人の会」の皆様が気さくに声をかけて下さり、楽しい5日間となりました。

今年の会場は、中国西南部に位置する貴州省興義市。万峰林という独特な山々が観光名所になっています。開会式は、その山々を背景に会場が設営され、来賓の方々の挨拶が延々と続きました。中国文化の片鱗を垣間見た気がしました。

各国の番組を鑑賞した中で、特に印象深かった作品が、韓国ドラマ『私の後ろにテリウス』。ある真相を追う男性スパイと普通の専業主婦が織りなす、サスペンスコメディです。韓国でも家事と仕事の両立に悩む女性たちの話題は多く、それがサスペンスに盛り込まれて展開していくので、続きが気になりました。

各所で民族衣装を着たミャオ族のお出迎えがあり、ガイド役として同行してくれた江さん、蒋さん、張さんたちのチームには本当にお世話になりました。張さんとは、現在もやりとりをしています。また、「放送人の会」の、特に相田さんや村上さんのお話を聞けて大変勉強になりました。

豊かな自然や素朴な中華料理、知り合った人々を通じて、これまでの歴史や今回のテーマである「多様性」について考える機会を頂きました。改めて御礼申し上げます。

（放送文化基金）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大山勝美さんの思い出と遺志

鈴木嘉一

読売新聞で編集委員をしていた2007年、日韓中テレビ制作者フォーラムに初めて参加した。中国天津市で開かれた第7回大会だった。放送人の会代表幹事として日本側の組織委員長を務める大山勝美さんから「一緒に行きませんか。いろいろ収穫がありますよ」と誘われたのである。北京五輪を翌年に控えていただけに、「オリンピック精神とテレビ制作者の責任」がテーマに選ばれた。

以来、できるだけ参加するよう努めてきた。私は12年にフリーとなり、放送人の会に入会した。翌年からは6年続けてフォーラムに参加し、新聞のコラムや放送専門誌などに見聞記を書いてきた。参加したのは計19回のうち9回を数える。大山さんとともに第1回からこのフォーラムを推進してきた韓国のドキュメンタリスト鄭秀雄（チョン・スウン）さん、日本語も中国語も達者な韓国MBCの宋日準（ソン・イルジュン）さんらと知り合ったことなど収穫は多かったが、真っ先に思い浮かぶ人はやはり大山さんである。

13年10月、中国無錫市で開催された第13回大会では、テレビ神奈川（tvk）と韓国の公共放送KBSの共同制作として、大山さんが総合監督を務めたドキュメンタリードラマ「希望の翼」が上映された。朝鮮人学校の教師をしていた父親とともに満州（現・中国東北部）で少年時代を過ごした大山さんにとっては、本望だっただろう。

当会員でもある元tvkプロデューサーの寒河江正さんと天文学者の羅逸星（ナ・イルソン）さんは今の北朝鮮で生まれ、同じ中学校で学んだ。羅さんが日本の植民地時代に禁じられていた朝鮮語をつい使って、窮地に立たされた時、寒河江少年は「朝鮮人が朝鮮語を話して何が悪い」とかばった。戦後離れ離れになった2人は、41年ぶりに再会する。まだ日本の大衆文化が開放されていなかった韓国で、音楽による草の根交流を実現させ、日韓間に小さな風穴を開けた。大山さんは11年に出版された2人の対談集を読んで、映像化に執念を燃やし、KBSとの交渉では日韓中フォーラムで培った人脈が生かされた。

「希望の翼」の上映後、韓国の男性プロデューサーは「私たちの世代は親から『韓国語を使

えない時代があった』と聞かされていたので、胸が痛み、涙も出た。日韓の2人がまいた希望の種が成長し、やがて実を結ぶ。すばらしいドラマだ」と評した。その一方、「日本の統治下でも、善良な医師だった寒河江さんの父親のような日本人はいただろうが、それはごく一部に過ぎない」と指摘した。

韓国では当時、微妙な日韓関係が影を落としていたせいか、まだ放送されていなかった。中国側からは「とても感動した」との感想が相次ぎ、それ以上の議論には至らなかった。違和感や疑問点の率直な表明は、相互理解への第一歩となる。「国同士の関係が政治的にギクシャクしていても、文化交流は別」という姿勢は参加者に共通していると思われた。

翌年の14年9月半ば、横浜市で開かれた第14回大会にも大山さんは4日間通しで参加し、いつもと変わらないように見えた。3日目の最後に、中国残留孤児だった祖父と孫のふれ合いを描くNHK広島放送局制作のドキュメンタリードラマ「基町アパート」が上映された際、満州や日中戦争の表現をめぐって、中国と韓国から厳しい批判が続出した。中国勢が直後の記念写真撮影をボイコットし、会場が重苦しい空気に包まれる中、事態を収拾するため、中国の幹部と粘り強く対話を重ねていた大山さんの姿は忘れがたい。

ところが、10月に入ってから緊急入院し、多臓器不全のため急逝した。82歳だった。腸閉塞で入院したことがあるとは聞いていたが、余りにも突然の訃報だったし、横浜での様子を思うと、にわかには信じられなかった。

大山さんはその年の春、「後進のために使ってほしい」と5000万円を放送人の会に寄付していた。この基金で「大山勝美賞」が創設され、日韓中フォーラムの運営費の一部にも充てられてきた。会としてフォーラムへの参加が今回限りとなった現在、大山さんの遺志をどう生かし、大山基金をどのように運用していくか、新たな課題が浮上している。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

地方都市でのフォーラム

曽根英一

「秋画」の見出しに、ハウスらしき中で水やりの写真、トマトらしき赤い実がなっている。上海から飛行機で3時間半も飛んだベトナム近くの興義市内のホテルのロビーに置かれた「貴州日報」をなんとなく理解した。「多彩な文化」がテーマの今年の日中韓フォーラム、漢字の意味が取れる3か国だと改めて思う。

中国に着くや体調不良の便秘。通訳助手の2人の中国人女性に「浣腸」と書いて近くの薬局に連れて行ってもらった。日本製品でないのだが大丈夫だろうと腹をくくった。いや、そんなこと構ってるひまはない。「日本企業で働きたい。憧れている」という通訳女性には感謝であった。

中国の薬局は小ぎれいなコンビニのような陳列棚に薬が並べられていた。市内中心部にはモールもあって、日本のスーパーのようなレジが並ぶ。

物が溢れている印象を得た。中国建国70年、もうひとつ、中央の動きを伝える英字紙。「高速成長から高品位の開発へ」の見出しが目を引いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

貴州省大会に参加して

多田健

中國で最も少数民族が多く、最も貧しいと聞かされていた貴州省は、予想に反して都市開発が進み、高層マンションや大型ショッピングモールの整備が進んでいるように見えた。数百メートルごとに通りに立つ清掃員は、視な鮮やかなオレンジ色のユニフォームに身を固め、タバコの吸殻はもちろんのこと、山深い州にも関わらず彼は一枚見逃さない徹底ぶりで外国メディアの我々を驚かせた。国内格差の抑止や少数民族らによるテロ対策に重点を置く現政府が、日韓中のテレビ制作者フォーラムをあえてこの地で開催した意味が伝わってきた。

フォーラムは各国の事情を象徴する番組が並んだ。日本は地方民放局であれNHKであれ、テレビ局としての立脚点を示す番組が上映された。弊社は、営業と報道の対立や作業と個性のぶつかりをコミカルに描いた地方局物語「チャンネルはそのまま!」を見てもらった。

各部門で成熟を極める韓国は、次の一手を意欲的に繰り出しており、ドラマ部門では、子育て女性のあるある感と公安諜報員のサスペンスを何とコメディーで成立させていた。

中國は、各番組の制作者が中国共産党の強い指導の下、創造性やジャーナリズムを巧みに発揮し二国にない作風を生み出していた。

フォーラムを通し参加者は、表現における各々の現在地を強く再認識したように思う。

終了した翌日、飛行機の関係で未明にホテルを発った。市内中心部にそびえ立つ高層マンションは、昼間は完成しているように見えていたのだが、どの部屋も真っ暗だった。

（北海道テレビ放送・プロデューサー）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

放送人として日韓交流の懸け橋に

田中則広

2010年の中国・蘇州大会から、「日韓中テレビ制作者フォーラム」に毎年参加させていただきました。多くの方々から刺激を受け続けた10年でした。

フォーラム参加のきっかけを作って下さったのは、韓国側のパートナーであった「韓国放送人会」の先生方です。ライフワークで日本と韓国の放送史を研究しており、NHKに勤務していた頃から、時間を捻出してはソウルの韓国放送人会を訪ねて、韓国放送史の聞き取りを行なってきました。毎回、お付き合い下さったのが、韓国放送人会の中心にいらした崔彰鳳（チェ・チャンボン）先生と安平善（アン・ピョンソン）先生です。崔先生は1956年に開局した韓国初のテレビ局KORCAD・TVで『天国の門』や『死刑囚』などの生放送ドラマを演出、「TV・PD1号」と呼ばれた有名人です。かつて、『東亜日報』の直営ラジオ局として軍事政権下の韓国で政府批判を展開した東亜放送の制作現場を指揮し、その後、韓国を代表する放送局MBCの社長を務めた経験もお持ちです。また、長年にわたって崔先生を支え、苦楽を共にしてこられた仲間の一人が安先生です。彼らはまさに、韓国放送史の「生き証人」と言えるでしょう。

2010年の夏、インタビューを終えた後に雑談をする中で、おふたりから「日韓中テレビ制作者フォーラム」への参加を勧められました。

「韓国に馴染んでいるから、韓国放送人会からフォーラムに参加しても構わないけれど、折角なので、日本の放送人の会に入会して、蘇州大会で合流しよう」

こうして大山勝美先生をご紹介頂き、日本の「放送人の会」の末席を汚すことが許されました。初参加の蘇州大会では、出品作品をめぐる意見の違いから、韓国と中国の間で生じた激しい衝突に圧倒されながらも、個人レベルでは友好的な両国の制作者たちと交流を深めることができました。また、情緒ある蘇州の街

並みを満喫した記憶も鮮明に残っています。その後も、日韓双方の放送人の集まりで出会った多くの先達や、韓国ＰＤ連合会の同年代の友人とは、フォーラムの期間中だけでなく、何かにつけて東京やソウルで顔を合わせては日韓の将来について語り合ってきました。中国の制作者の方々とも、交流する機会が持てたことに感謝しています。

日韓の間をつなぐ仕事をしたいと思ったのは30年以上も前のことです。韓国の軍事政権が崩壊した１９８７年、火炎瓶や催涙ガスが飛び交う留学先の延世大学（ソウル）は、キャンパス内でも死者が出るなど、緊迫した空気に包まれていました。「歴史の転換点」を目の当たりにして、いかに催涙弾から身を守るのか、また、催涙ガスを浴びた時の対処法などを韓国の学生たちから教わりました。その横で防毒マスクにヘルメットを被り、カメラを担いで駆け回る取材陣に憧れ、放送の世界に飛び込みましたが、日韓両国の多くの方々に支えられながらここまでやってくることができました。フォーラムでの貴重な体験や人脈もまた、生涯の宝物です。およそ30年間にわたって通い続けた放送局での仕事は２０１８年の春にひとまず区切りをつけ、現在は大学において若者たちと一緒に、メディアが抱える課題や日韓の問題などについて考えています。これからも引き続き、メディアを通じた日韓交流の懸け橋になるよう、また、懸け橋となる人材を育てていくよう、試行錯誤を続けていきます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「日韓中」後方支援を担当して

千葉邦彦

この度の「日韓中テレビ制作者フォーラム・中国大会」にあたり、後方支援、具体的には、中国側（中国テレビ芸術家協会）と放送人の会との「文通」業務を担当いたしました。

「文通」とは実に懐かしい言葉ですが、この時代では、郵便の時代とは異なり、メールによる〝時を移さないコミュニケーション〟、いわば「電子文通」といったらよいでしょうか。交信時刻は夜更けであったり、明け方であったりしました。あちらからの英文を和文に翻訳して関係の方々にお伝えし、また、こちらの和文を英訳して送る仕事は、実に味わい深いものがありました。

個々の内容についてここで紹介することはできませんが、会ったことのない、話したこともない相手との、双方とも母国語でない英語での交信を重ねるうちに、何となく先方の人柄・個性のようなものが分かるようになりました。推測ですが、先方はとても熱意に溢れる人物であることが、行間から滲み出ているように思えました。フォーラムが成功裡に終わったあとのやりとりのなかでは、翻訳者のスタンスを少しばかり超え気味の、情熱的な英文を仕立てました。

日韓中いずれの国も、このプロジェクトを共同で行ってきたこと、また、かたちは変わろうとも、継続させていくという熱意、情熱があれば、必ずや実りがもたらされると信じます。今野会長から、後方支援も含めて「Ｏｎｅ　Ｔｅａｍ」であったとの労いのお言葉をいただき、微力ではありましたが、参画できてよかったと思っています。

皆様、大変お疲れさまでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

面白くて、共感して、幸せでした

辻本昌平

日韓中テレビ制作者フォーラムに参加させていただいて４回目になります。

今回一番刺激を受けたのは、相田さんにお会いできたことです。80歳を過ぎても衰えない制作意欲と好奇心。そして編集までお一人でされたとのこと。また、ご一緒されたプロデューサーの矢吹さんに「編集機を替えたせいで制作費がかさみ過ぎた」「もっとテンポ良く繋いでほしい」と言われたなど、みんなの前で愚痴を話され、矢吹さんが恐縮そうに聞いていらっしゃる姿が面白かったです。お二人の仲の良さを感じました。

そして、矢吹さんのプレゼンは、日本代表にふさわしく、明快な語り口でテレビの新たな可能性を話され、大変興味深いものでした。

ドラマ「チャンネルはそのまま」は、私は全話拝見し、とても面白く大好きなドラマです。ローカル局の一員としてとても共感しました。会場でも中国、韓国の方たちの笑い声が聞こえていました。

また、プロデューサーの多田さんのプレゼンを聞いて、北海道放送の方たちのテレビマンとしての心意気を感じました。

そして、日本放送文化大賞グランプリおめでとうございます。先細りのローカル局の中で、何か新しいことや、大切な事を伝えていかなければ生き残っていけないと痛感しました。

河野さん、深尾さん、渡辺さん、大変ご足労をおかけしました。

これでフォーラムは最後ということですが、制作者たちのためにも、大先輩の方々に、これからもご尽力いただけますよう、よろしくお願いいたします。

そして、ローカル局の巨匠として私が若い頃から憧れてきた曽根さん、村上さんとご一緒できたことが幸せでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日中韓制作者フォーラムに参加

中﨑清栄

中国は兎に角、挨拶が多くて長い・・・、と今回も価値観の違いを実感したＴＶ制作者フォーラムだったが、日本側の矢吹さんや多田さん達の発表は「時間遵守で完結、分かりやすく流石」だったし、河野さんの挨拶も「哀しみ、喜び、葛藤を伝え、多様性や自然に目を配り、豊かな生活を描くのが制作者の仕事、発展と共に土地は画一化するが希少民族の地でアジア文明の多様性を守りたい」に共感した。

そんな私の楽しみは今回も夜のバーだった。松尾バー　伊藤バーと同じく深尾オーナーは、疲れも見せず「放送界の重鎮なのにご自宅でもなさっている?」と思う程、氷、酒、コップ、つまみの用意は万全だった。

表情も和やかにメンバー達はベッドに腰掛け、床に座って本音話。次から次へとテンポよく展開する様は、中国流セレモニーのとまどいをはき出す役割を果たしたかも。

そんな会話で今も残るのは、今回の開催にご苦労された世話人の一人、渡辺さんの「金がからないよう形を変えて続けゆきたい」だ。民間外交だからこそ地道に継続出来てきた、制作者が国を超えて交流できる場の復活を願っている。

一日掛かっての金沢帰路だったが、地方にいては会えない相田さんを始めとする著名放送人と親しく話が出来、本当に良かった！

皆様、有難うございました。祈！再会。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

巨象の肖像

深尾隆一

日韓中テレビ制作者フォーラム一色に染め

られた感がある半年だった。今年中は無いな、と思っていた8月に突然来た10月末開催の知らせ。ドタバタと始まった準備会議の準備。そして台風に翻弄されて2泊3日の予定が3泊4日になり、結局最終日は成田空港で一夜を明かして4泊5日になった準備会議への出張。

それからチーフの渡辺さんは、変更に次ぐ変更、追加に次ぐ追加。昨年までなら半年分の作業をほぼ1ヶ月半でやりきった。彼のパワーには心底敬服。

私もアシスタントとして準備会議での経験から、高齢者を含めた20名の参加者と上海から飛行機で3時間半という僻地「興義」往復の為、考え得る準備をした。途上色々トラブルもあったが、それでも何とか羽田空港に無事帰り着いた時はほっとした。

初日の「アウトドアスポーツ大会」開会式の印象は強烈だった。我々のフォーラムとはほとんど関係ないが、興義で開催される意味もフォーラムがこの大会の一環として位置付けられ、言わばスポンサードされている為であり、開会式への出席は「義務」なのである。

予め渡された席次表に約８００人以上の名前が小さな字で指定されており、まず度肝を抜かれる。否応なくそこに着席。初めの30分は民族舞踊の披露で素晴らしかったが、それからの2時間近くは延々と挨拶が続く。政府関係者、主催者、ゲスト。しかも日本語への通訳は一切なし。多分自画自賛とスローガンやキャンペーンの類なのだろう。景色は誠によろしいが風吹きすさぶ屋外の会場である。日本団にとっては壮大な我慢大会と化す。

何故このイベントのことを細々と、とは思うが、この後ホテルに戻って始められたフォーラムの運営に通底するものがあったからだ。

まず何事も席次。自由な討論の場ではあるが、これまでの日韓中と異なり、席が完全に指定されており、河野団長は最前列のＶＩＰ席で孤独を強いられる。

挨拶が長い。しかも中国語はトーンが高く、総じて音量が大きく、ヘッドフォンからの同時通訳が聞き取れないほど。それで10分の予定が平気で30分近くなったりする。シンポジウムではこの為、時間切で質疑応答がカットされた。

そして内容は自画自賛。まあこれは日韓も多少はあるが、それにしても今中国は街を歩けばそこら中にスローガンが氾濫。内容にも自ずとそのトーンが滲み出る。腐敗撲滅、偉大な中国文明礼賛。それ自体は素晴らしいことであっても、自己主張が強く、押し付けがましさが鼻につく。受け手の都合は関係ない。次第に我慢大会になる。

とは言うものの、そのエネルギーの凄まじさは恐ろしいまでだ。人々は今日より明日は良くなるという希望に溢れており、大筋で政府に対する信頼というものがあるように見えてくる。

作品内容はその勢いそのままである。ドラマはキャンペーンを脚色したようなもの。ドキュメンタリーとエンターテインメントは偉大な中国文化の復権を称揚するもので、今再び、龍が目覚めた、という感じを持った。

これは巨象のごく一部に触れた個人の感想に過ぎないだろうが、その「一部」は紛れも無い事実で、それに翻弄された経験も実体験である。

これから日本は、我々は、この巨象と付き合っていかなければならないのだ。その意味で、今回の興義大会にスタッフとして参加出来たことは個人的にも意味のある素晴らしい経験となった。

末尾ながら事務局でずっとサポートして頂いた逸見さん、須斎さん、そして昼夜を問わず日中のメールのやりとりを担当して頂いた千葉さんに謝謝！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

他者を貶めることで自らのアイデンティティーを高めるな

「日韓中テレビ制作者フォーラム」と放送人

前川英樹

今年の「日韓中テレビ制作者フォーラム」が終了した。放送人の会が主催団体として関与することはもうない。

私がこのフォーラムに参加したのは２０１１年の札幌大会以後なので、フォーラムの歴史を語る立場にはない。しかし、私は、東アジアの歴史と地理に強い関心を持っているので、このフォーラムにはいろいろな思いを込めて参加してきた。韓国、中国の番組を見て意見交換することだけでなく、彼らと東アジアの現在について語ることができれば良いと思っていた。もちろん、例えば中国という国の状況を考えれば、それは容易でないことくらいは承知している。それでも、ある時期までは個人としての考え方を婉曲にあるいは短くても率直に聞くことはできた。しかし、この数年は、それもほとんど困難なことが分かってきた。

それもまた現実なのだから、その上でフォーラムを持続して行けばまた違う局面もありうべし、という考え方もあるだろう。では、その「違う局面」を待ちつつ新たな問題提起を継続していく体力(組織力、企画運営力、財務能力)が私たちにあるだろうか、そしてその間は何を求心力としてフォーラムを持続できるのか、それが私には見えなかった。番組販売や共同制作はそれに代わる意味があるとは思えない。それは、この会の存在理由とは異なるベクトルだと思う。

そう考えた時に、ある情景を思い出す。

それは、２０１４年の横浜大会の総括である。

「基町アパート」を巡る歴史認識問題で議論が混乱紛糾した翌日の総括で、放送人の会を代表して河野尚行さんはこう述べた。「ここに参加している日本の放送人の会のメンバーは、この(歴史認識)問題について、日本の中で最も理解のある人たちだと私は思う。その人たちでさえ、あの15年戦争について日本の国民を被害者として見がちであり、加害者としての意識が足りないことがよく分りました。私たちは、こうした議論を避けずに何度でもしなければいけないと思っています」と述べた後で、「しかし、その時に戒めるべきは、お互いに〝他者を貶めることで自らのアイディティーを高めるべきではない〟ということです」と発言したのだった。この言葉に私は深く同意した。それは、メディアが国家や民族、あるいは何であれ既存の何かに傾斜してはならないことを鋭く衝いた一言だった。ナショナリズムの陥穽はそれほどに危ういのである。それは、メディアの自立と放送人の存在理由の根拠について、頂門の一針というべき一言だと私は思う。

どのように通訳されて韓中の参加者に伝わったか、私は知らない。しかし、フォーラムはまさにそのことこそ語り継ぐべきだったのであり、それがフォーラムの存在理由だったのだ。しかし、その可能性が見えない状況が続いていることを放送人として無念に思い、そうであるならばやはり区切りをつける時期が来たのだと思っている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私の人生を変えたテレビ制作者フォーラム

牧之瀬恵子

２００３年ＮＨＫのロケで初めて訪韓、済

州島のフォーラムを制作した。それ以来ほぼ毎年参加したフォーラムで出会った人が近年の東アジアを大きく変えた。圧倒的な才能で韓国バラティー界を一世風靡し、中国に渡って韓中の共同番組を手掛けたKさん。冬ソナによって韓流ブームを生み出したYさん。日中韓の3か国語を操り三国をつなげて、韓国社会に影響力のあるSさん。挙げれば枚挙にいとまがない。

私はこんな人々の魅力に取りつかれ韓国に留学、韓国番組に多く関わることになった。私の人生と韓国は切っても切れない仲になったが、私の友人にもう一人、フォーラムで人生が変わった人がいる。

済州島で出会った韓国のTBS（交通放送）のジョン・キョンフンさん。キョンフンさんは、出会った時日本語は全く話せなかった。しかしフォーラムで日本に興味を持ち、番組制作の合間に日本語を猛勉強。

ついに今は高麗大学の博士課程で日本の歴史を研究している。先日韓国で会った時には、日本書紀など古代の歴史書と格闘していた。私が彼と令和天皇の即位行事を見ればきっと私の知らない日本の歴史を解説してくれることだろう。

もし、テレビ制作者フォーラムがなかったら…アジアの関係は今と同じだっただろうか。確かに現在日韓関係は最悪とも言われるが、日本では韓国文化が定着し、若者は関係悪化にお構いなくK―POPを聞き、韓国コスメを買っている。NHKでも韓流世代に育った韓国語使いのPDが増えているという。また、韓国でも韓流や日本ブームで日本人個人へのイメージは良くなり、抗議デモも基本は日本の政権に対するもので、日本人個人に向けられてはいないという。

こうした日韓相互理解の底上げにフォーラムの役割は本当に大きい。番組制作者が互いの文化を理解し、会った人に魅力を感じる。そのことが大きく人々と国際関係を変えていく。それを思うとき、つくづくこの会を始めてくれた創始者に感謝したい。

前出の日本研究を始めたキョンフンさん。今は放送局をやめYouTubeとPodcastで文化論を放送して人気を博しているという。私の愛するテレビ制作者フォーラムは今年で放送人の会の手から離れるが、テレビとインターネットの融合が進む中、メディアで人をつなぐフォーラムの在り方も変革が求められているのではないかと思う。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

〝潤滑油〟の行方

村上雅通

興義フォーラムに参加した作品は、いずれも興味深い内容だった。なかでも強烈だったのは韓国のドキュメンタリー「どこでも存在し　またはどこでも見つけない　ジョン、氏闘、竜賢」だ。作品の冒頭、里山の草ぼうぼうの畑で無農薬野菜を栽培し、冬場、上半身裸で雪に寝そべる〝自然人〟が登場する。7年前に取材した映像で、当時は〝奇人〟として紹介していた。その後、制作者は男性が韓国の民主化闘争に加わったり、警察の拷問によって死亡した若者の遺族を支援したことを知る。改めて取材を試みたが、男性は脳梗塞の後遺症で口を利くことが出来ない状況だった。制作者は男性と関わりのあった人たちを探し当て、男性の人生の機微に触れていく。男性が〝自然人〟のころに作った詩が心に染み入る。真正面から権力を批判することはないが、韓国の民主化の過程で男性が味わった「割り切れなさ」と、その後の「カタルシス」が静かに伝わってきた。同時に発足当時のフォーラムが蘇った。

２０００年の1回目、日本側からでた「個人ではどうしようもない割り切れなさを伝えるのがドキュメンタリーの役割」に異議を唱えた韓国側。当初から関わった私には、互いに歩み寄ることのなかった当時を思うと隔世の感がある。フォーラムを立ち上げた鄭秀雄さんの目的の一つ「韓国のドキュメンタリーの制作レベルの向上」はかなり進んだ。一方で、最大の目的だった「制作者が日韓の〝潤滑油〟になる」は、どうも1回目の状態に留まっている感じがする。放送人の会としての参加は最後になったが、何らかの形で〝潤滑油〟になりたいという思いが、改めて湧き出でた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

フォーラムの帰途、バスの中で

日韓中フォーラム担当理事　渡辺紘史

中国貴州省興義での閉会式を終えた翌日の11月2日早朝5時、帰国のため省都貴陽の空港にむけ出発した我々のバスは、漆黒の闇をひた走っていた。高速に入ったはずなのに、左右に激しく揺れ、音をきしませながら走って1時間程経った頃だろうか、ようやく空がかすかな蒼みを見せ始めた時、私は窓外に2つの白いものを認めた。ひとつは、たなびくベールのような流れ、一つは、くねったベルト状のもの。間もなく、尖ったピミッドやサボテンのような屹立した山塊がその稜線を見せ始めた時、その正体がはっきりと姿を現した。白いベールは、雲の流れ。バスは流れる雲の上を走っていたのだ。そして、輝いて見えた白いベルトは、舗装されていない道の連なり。白さの正体は石灰、石灰岩の砕けた土。そうなのだ、ここは大きなカルスト台地の上にある。昨日訪れた「万峰林」、地上に現れた鍾乳洞、2万にも及ぶ円錐状の山が林のように屹立する、その観光地を思い出した。

いうまでもなく、ここは太古の昔は海底にあり、集積したサンゴなどのカルシュウム質が隆起した結果、今のカルスト台地の自然が生まれ、貴州の人々の暮らしの土台になっている。４５０億年前にできた地球に生物が生まれ、無限に近いその生死の繰り返しの後、その残滓が蓄積され、それが、ここユーラシアの大地を生成したのだ。

そんな地球上では砂の一粒でしかない人間が、今回のフォーラムでは、４５０億年の地球の歴史に比べれば、１００年足らず、光の瞬ほどの歴史でしかない「テレビ」の行く末を議論した。そんな〈マクロ〉的規模では、極めて小さな会議の中で、議論する日韓中１００人の参加者の一人ひとりの脳中の〈ミクロ〉世界では、億を超えるニューロンとシナプスとの交接が何兆回も繰り返され、議論の詳細を確実に刻み込んだはずである。

と、まぁ、4時間半のバスの中で、このように過剰な感傷に浸っていたのは、今回のフォーラムが、中国南西部雲南からヒマラヤ山脈に繋がる貴州省興義という、日本からあまりにも遠いユーラシア大陸の真ん中で、しかも、実に慌ただしく、かつ強引に、急ごしらえで開催されたにもかかわらず、党の指導を受けた貴州省の腕力で、内容はともかく、成功裏にやり切ってしまうという、理不尽にも見える、不思議で極端な中国のスケール感に圧倒されたのに加え、19回も続けてきたこのフォーラムが、今回を以って、放送人の会の手から離れることへの個人的感懐がバスの中で溢れでてしまったからに他ならない。（ちなみに、フォーラム自体は来年も続き、次回の開催は韓国である）

空港に向けて走るバスの中では、日本参加

団を率いて気苦労も多かったであろう、河野尚行団長がゆったりと景色を見やっている。フォーラムの期間中、発表や取材の時間も含め、全ての時間といってよいほど撮影や録音を続けた83歳の現役ディレクター、相田洋さんが移動バスの中でもカメラを回し続けている。全旅程、幹事役として細かい目配りをしながら、〝深尾バー〟を主宰し、参加者間の懇親を深めた深尾隆一さんが、到着時間を気にして時計に目をやる。重いカメラを背負って道中の記録係を務め、急遽ドラマ作品講評役として登壇した菅野高至さんがメモを取っている。私の下手な番組紹介にもかかわらず、会場からの質問に的確に答え、さらには未来メディアをどうテレビ番組に生かすかを発表したＮＨＫの矢吹寿秀さん、地方放送局における通信メディアの有効な使い方の実例を示した北海道テレビ（ＨＴＢ）の多田健さん、二人とも、もう帰国後の仕事が気になる様子で、メモを手繰っている。一番の年長者ながら、会議はもちろん全行程に参加してくれた寒河江正さん。名古屋から参加され、やはり全行程皆勤の後藤和晃さん。親善の場の盛り立て役として活躍された近藤邦勝さん。口数少なく、しかし毅然として日本団の交通整理役を買って出てくれた柏木登さん。このフォーラム初回から参加、旧知の王占海さんとの交友を深められた村上雅通さん。足の具合を気にしながら今回も参加してくれた曽根英二さん。地方局での貴重な体験や作品論を今回も語ってくれた中崎清栄さん、そしてカメラを片時も離さず、大会の様子を撮影し続けた辻本昌平さん。折々に的確な中国事情を説明してくれた、中国通、税理士の下崎寛さん。英語を駆使して他国の参加者と交歓した牧之瀬恵子さん。相田さんの韓国語通訳を見事に務め、皆をびっくりさせた放送文化基金の大園百合子さん。そして唯一の20代、鈴木祥吾さん。皆、それぞれの思いの中で、窓外に流れる風景を追っている。バスの中の19人に加え、一日早く、治療のために帰国された放送文化基金の西村陸生さんも含め、総勢20名、中国、韓国に日本の大人のパワーを見せつけてくれました。皆さん本当にお疲れさまでした。

そして、事務処理一切のとりまとめに努力頂いた、事務局の須窟恵美子さん、逸見京子さん。日中のやり取りの英文訳を引き受けてくれた事務局長の千葉邦彦さん。難渋を極めた準備会議出張で、深尾さんと寧波の町で一緒に宿探しをした田中則広さん。皆さん、ほんとうに、ありがとうございました。

――と、帰国解散を前にして、感懐に浸っているうちにバスは貴州省の州都貴陽市の空港に到着した。２０１９年11月2日9時45分（中国時間）であった。

この後は、私が参加して以来のフォーラムを振り返りたい。

放送人の会と日韓中テレビ制作者フォーラム～私のかかわったフォーラムの総括

２００１年10月15日発行の「放送人の会」会報Ｎｏ９にこんな記事がある。短い記事なので、全文紹介する。

日韓テレビ制作者交流

村上雅通（熊本テレビ　会員）

日本と韓国のテレビ制作者が玄界灘のフェリー船上で語り合う集いの世話人を務めています。テーマは「日韓制作者の建前と本音」。出席者たちが作った番組をもとに、歴史や現状認識の相違点、共通点を浮かび上がらせ、今後の交流の在り方を模索します。11月17日～１９日、福岡集合で参加者募集中です。興味のある方はご連絡ください。

個人としての村上会員が、個人としての会員に向けて提案した企画は「個人が個人として参加し、本音を語り合うフォーラム」。これが始まりであった。

本音を語り合う＝相互の相違点と共通点を理解しあうことが交流の基礎となるという分かりやすいコンセプトである。この時のフォーラム名は「アジアテレビ制作者フォーラム」以降は皆さんご承知のような経緯を辿った。

船上での、喧々囂々の喧嘩まがいの議論で終わった第一回であったが、次回対馬では、車座となった参加者同志で熱心な議論が行われたという。そして3回目である。フォーラムは、中国がオブザーバーとして参加し、済州島で開催された。この時の中国の提案が、結果的に現在までのフォーラムの実質を縛ってきたといえる。中国の提案は、3国が主催団体を決め、実行委員会を組み、三国で持ち回り開催としようというもの。加えて提案されたのは、必ずしも明文化されてはいないが、当時の担当者間で確認されたであろう「テーマとしては、政治、社会、歴史を排除する」であった。　日本は「放送人の会」を中心に、放送批評懇談会や放送番組センターが組み、韓国は、現役プロデューサーたちの職能組合、韓国ＰＤ連合に加え、日本と同じ現役ＯＢたちの団体、韓国放送人の会、そして中国は、国家組織である中国電視芸術家協会である。

このようにして中国での最初の大会、「日韓中テレビ制作者フォーラム」つまり、国家名を冠としたフォーラムが、4回大会として揚州で開かれたのである。江沢民の故郷で開かれたこの大会は、現在の中国大会の祖型となった。中国では、以降、党主導のもと芸術家協会と地元テレビ局が「壮大で華麗な行事」として総力を挙げて開催するフォーラムとなった。

この時から、三国の主催団体の国家との距離、現場制作者との距離の違い、そして何よりも三国の制作者の表現者としての立場の違いが、三国が理解するフォーラムのありよう（開催の形、議論の内容、そしてフォーラムに何を求めるのか）に微妙なずれをもたらし、そのまま継続されてきたといえる。そして、そのずれは、紆余曲折を経ながらも、解決を見せることなく推移し、今に至ったと理解するしかない。

フォーラムの始まった２００１年当時、すでに制作力（内容の質を担保する）において日本の優位性はなく、中国、韓国では、制作・放送の水平分離が進み、活発なソフト開発（制作資金獲得、番組販売、共同制作の推進）競争が始まっており、中韓二国の関心は、もっぱら実利（どうしたら買ってもらえるか、どうしたら共同制作できるか、どうしたら資金を出してもらえるか＝きわめて真面目で、まっとうな望みであることは否定しないが）に関心を示す一方、日本放送界は、ガラパゴス的な安定の中に安住し、その競争の中に入る必要もなく、意欲もない状況であり、若い参加者はもちろん、自ら制作をしない老人の会員たちにとっては、実利を持ち出す彼らについていく術もなかったのである。当時の大山さんが、それはそうだとしても、日本の制作者は中国、韓国に学ぶべきであり、若い制作者を多数参加させたいと、放送人の会の若い人への門戸開放に絡めながら、仰っていたことを思い出す。

私自身は、２００８年の第8回福岡大会からの参加となるが、以降実施実行委員としてかかわった第10回蘇州大会以降、①開催規模とそれにかかる費用の捻出、②現役制作者の参加、③自由な作品選択と議論の確保（フォーラムの目的）という、ずれから生じた三つの難

題と向き合ってきた。

特に、現役参加者の参加については、作品選択や、その制作者の参加勧誘に関して、必ず人任せにせず、自らが当たることをモットーにしてきた。そのことがフォーラムの議論の質を上げることと考えたからだ。加えて議論の質を確保するための、同通や字幕の上質化に拘った。留学生を中心にした学生通訳を募集し、大会運営にも参加してもらった14回横浜大会、17回東京大会が、いくつかの課題を残しながらも、三国間の共通理解に役立ったことを確信している。

といいながら、今回の19回興義大会を以て、放送人の会がこのフォーラムの主催団体から降りることとなった。それは、2年前に組織決定し、1年半前の第18回光州大会準備会議の際に二国に通告した事実だが、その件につき改めて記してみたい。

放送人がこのフォーラムから手を引く理由として、中韓二国にどう説明するか、いささかの議論があった。結果は、放送人の財政ではこの規模のフォーラムを負担しきれない、というものであった。もちろん私も同意したのだが、それが手を引く主要の理由だったのか。

今、敢えて申し上げると、二国に告げた理由は、表向きであり、真の理由は、放送人の会にとっては、フォーラムが無用で厄介なものとなったという以外ない。

国家に直属した主催団体の中国、途中から、このフォーラムの創始者である鄭秀雄さんや先輩の団体「韓国放送人の会」を排除した(?)現役の制作者の組合団体の韓国、それに引き換え、今野さんが言う「五超の会=世代・地域・ジャンル・組織に加え、国境を超えて活動する」日本の放送人の会が、当然生ずるであろういくつかの課題に〈手を打ってこなかった〉、そしてその結果、続けるメリットがなくなった、それが手を引く真の理由となったと理解したい。金の問題は、そう大したものではない。もちろん、費用対効果という観点では、それも理由となりえるが。

手を打ってこなかった、その意味では、私自身の責任も重いと考えている。

第10回蘇州大会での「ゴキブリ事件」、韓国制作の食文化を伝えた作品で、中国人がゴキブリを食すシーンを党役員でもある担当者が、無断でカットしてしまった事件、中国では普通かもしれない国家の介入を、なぜ「ひとごと=他人事」として議論を避けてしまったのか。

第14回横浜大会の時の「基町アパート」で議論が紛糾し、中国代表団が退場した後、なぜ議論を突き詰めなかったのか。加害者意識の欠如として鋭く反応した韓国のプロデューサーに対し、国家を背負って参加した団長の怒りの姿勢に反応して退場した中国の代表団だったが、冷静に議場復帰を促しながらもかなわず、それ以降の議論を持ち越したやり方はよかったのかどうか。主催国日本の参加者が9・18を想起できなかった事実は致命的ではあったが、敢えて、この日にぶつけて日本が「基町アパート」を上映したとして翌朝にまで議論したという韓国団となぜ付き合うことができなかったのか。最終日であり、ナイトツアーがあり、最後の晩さんパーティーを控え、時間のなかったのも事実だが、何とかできなかったのか、議場での進行役をしていた私自身、悔いが残る。寒河江さんの所属するコーラス団が、三国の民謡を歌う、漸く和みだした会場で、戻ってきた中国の団長范さんと向き合い、「政治的な素材については取り上げない取り決めではなかったか」と詰め寄る彼に、「まずは、9・18という、お国にとって大事な日を失念していたことはお詫びするが、この作品は政治的ではない、今後もこうした作品を排除しないで、何かあれば、会場で議論しましょう」いうのが精いっぱいで、国家を背負っての議論はやめましょうと、はっきり言えなかったのは事実であった。

「他を貶めることにより、自らを高みにおくナショナリズムにメディアが寄り添うことの危険」を説いたあの時の河野さんの総括を、以降の議論に生かして来たのか、我々は、その後、そうした議論を避けてばかりで、フォーラム全体の議論の空洞化を生んでしまったのではないか。その結果、放送人の会の参加者にとっては、無益感が増大したのだと理解している。

番組作品は、ましてや国から命じられて作るものではなく、あくまでも個人の属性により、個人の意思で作られるものである、という自明なことを理解する放送人の会と、国家や党指導が自明な中国芸術家協会、革新政権が誕生すると、その聖地光州で開催された例にみられるように、政治的立場を遠慮なく表明する韓国PD連合、いい悪いは別として、これがそれぞれの団体が持つ属性なのであれば、手を打ったとしても、このフォーラムが継続できたか、というとそれも疑問である。

考えてみると、始まった時の日本のメンバーは、ベテランといえども、みな現役の制作者が多かったはずである。村上さん、大山さん、今野さんもしかり、みな現役。あれから、フォーラムの牽引車となるべき立場に現役である会員が、何人かでも登場したのか。現場を離れて久しい私などは、放送人の会自体が老化して、現場制作者が少なくなれば、放送人の会そのものは、このフォーラムの直接の受益者ではなく、若い制作者がこのフォーラムによって少しでも受益し、どう優れた放送人になっていくのかを、後見役として見守る役割に徹するべきではないかとずいぶん前から考えていて、前に挙げた大山さんの言にもある、なんとしても若い日本の現役制作者を中国、韓国の制作者と見合いさせたいという一念でやってきたつもりである。作品出品制作者は、なるべく自分で交渉し、直接対話をして参加を取り付ける。そんなことを課してきた。

つまり、後見役として自己満足する人々以外、フォーラムで、情報や知識を増やそうと考える会員にとっては、受益感もなく、手続き煩雑で、金もかかる、他の事業の推進を妨げる、厄介なものでしかないと思うのは当たり前のことなのだ。

以上、手を引くという結論は全く正しいということを前提に、今後を考えてみたい。

今野さんの言う「五超の」放送人の会の会員がかかわるフォーラムは、最初のフォーラム参加を呼び掛けた村上さんが言う、国家を背負わない「個人」による、個人の集まりが本音と建て前を素直にさらけ出しながら、忌憚のない語り合いを保証し、実りある結論を導くものであって欲しい。

そうした前提で、私が、今夢想するのは、三国間に、これまでのフォーラムを通じてできた個人的交わりをベースに、個人からなる数人でいい、実行委員会を結成し、彼らが、「後見役」となり、若い優秀な制作者を、数人ずつ集め、集団見合いをさせる会を設定するのである。各国にあるファンド(中国ではどうなるのかは措いて)に、3年間の資金援助申請を行いながら、少人数参加、短時間の機能的かつ自由なテーマ設定のフォーラムを企画する(三国から、アジア全体にまで視野に置きながら)禁じ手は、「5超を犯してはならない」である。つまり、「ナショナリズムと国家からの自由」である。

その場合の放送人の会の役割は、それこそ、資金獲得のバックアップであり、加えて一番大事なのは、放送人としての「知恵の提供」である。

資金獲得の手間と苦労を過大視する向きもある。心配は無用である。私は、札幌大会以降、横浜、東京大会での資金獲得の担当でもあったが、ＪＫＡ、放送文化基金、国際交流基金（隈部さんのお力を借りました）、その申請から、支払い決算までを担当した。

恵まれた（？）ＮＨＫで過ごしたせいか、自分で金勘定もせず、自分で資金を探す苦労もなく終わってしまった制作者人生だが、担当者から、小学生相手の様に叱られながら、分厚い申請書を書き、予算書を作り、見積り書など、慣れぬ書類を作りながら、申請から決算、そして検証まで、３年にわたる基金手続きを３回、10年間続けてきた。慣れてコツをつかめば、素人でも簡単、ボランティアではなく、専門家の手を借りてもそう高額にもならないだろう。この場合、放送人の会の役割は「後援」でいい。

村上さんが20年前に始めた取り組み、改めて新しく、誰か、始めませんか。

原点に戻り、個人として企画し、放送人の会は後見人役として、改めてバックアップに入る。放送人の国際交流、若い放送人の育成、まだまだやるべきことが残されていますよ。

私は、後見人の、又その後ろにいて、無い知恵を発揮する覚悟はあります。

なお、フォーラムの今後に関心がある方には、以下の会報を参照ください。これまでのフォーラムについて掲載されています。

＊会報No.9＊18＊21＊24＊25＊33＊37＊38＊42＊48＊49＊53＊58＊63＊67＊72＊75＊79＊82

万峰林　風景　　貴州省日本観光センター提供

日韓中テレビ制作者フォーラム略史

	開催日時	会場	テーマ
第1回	２００１年11月18日～　日	釜山～博多定期旅客船	ＴＶ制作者たちの歴史認識の問題
第2回	２００２年　月　日～	日本　対馬	日韓通信使時代の開幕
第3回	２００３年	韓国　済州島	日韓中共同制作と国際化への模索
第4回		中国　江蘇省揚州	民族文化の伝承とＴＶ制作者の使命

第５回　2005年10月８日～20日　　日本　東京　　家族―その今日・共同制作への模索
参加作品・日本「山小屋カレー」「あいくるしい」「わが子を鍛える　野村萬斎～狂言三代の初舞台～」　　韓国「四つの指で描く夢・ピアニスト　ヒア」「秋の洪所長」「ごめん、愛してる」　　中國「神州大舞台」「姑」「我がパパ、ママ」

第６回　2006年10月27日~30日　　韓国　慶州　　調和―ひと・自然・文化
参加作品・日本「日本最高齢の助産婦」　　韓国「君は僕の運命」「転向」「コレアコレア」「ハノイの新婦」　　中國「孤独な四不像の話」「茶葉古道」「喬家大家族」

第７回　2007年９月12日～15日　　中国　天津　　オリンピック精神とＴＶ制作者の責任
参加作品・日本「Drコト―診療所２００６」「夫婦道」「もぎたてテレビ70屋根付き橋の里」「コウノトリがよみがえる里」「いきいき！夢きらり、ボクらの島をドキュメント」「にほんごであそぼ」　　韓国「ありがとう」「お金の戦争」「テレビ随筆～故郷の人達」「シベリア虎三代の死亡」「一緒に楽しむ」「私たちの子供が変わった」　　中國「鑑真東渡」「一人の女婿は半分の息子」「長江を再言する」「農夫と鴨」「愛の彩衣」「２００６グリム童話物語王大会決勝戦」
▼日本からのゲスト参加小林綾子

第８回　2008年９月24日~27日　　日本　福岡　　若者たちの今
参加作品・日本「感染爆発～パンデミック・フル―～」「ハケンの品格」「やねだん～人口３００ボーナスが出る集落～」「ラスト・フレンズ」
韓国「東と西」「神の子供たち」「コーヒー・プリンス１号店」「ジャングル・フィッシュ」　　中國「森林の歌～大砂漠のコヨウ」「金婚」「奮斗」「08年新春コンサート～多彩な内蒙古」

第９回　2009年10月14日～17日　　韓国　仁川　　都市と人間
参加作品・日本「風のガーデン」「発見！人間の力～校庭芝生化キャンペーン～」「お買い物」「ネットカフェ難民」　　韓国「水の旅」「私には大事な夜」「誰でも良かった犯罪」「ソウルには愛いっぱい」　　中國「青春の主人公は誰なのか」「旅館」「道の上で」

第10回　2010年10月15日~18 日　　中国　蘇州　　私たちの暮らし―昨日・今日・明日
参加作品・日本「空飛ぶタイヤ」「無縁社会」「田舎のコンビニ」「ケンミンＳＨＯＷ」　　韓国「ゴキブリソナタ」　　中國「春草」
▼韓国の作品「ゴキブリ」を中国が無断で改変、韓国側は抗議してその後の試写をボイコット。

第11回　2011年９月23日～26日　　日本　札幌　　地域と暮らし
参加作品・日本「命の値段」「ミエルヒ」「嵐の気仙沼」「フリーター家を買う」　　韓国「向かい合って笑おう」「私の故郷」　　中國「暑立里」「野鴨子」

第12回　2012年10月11日～14日　　韓国　慶州　　歴史の中の人間
参加作品・日本「森と水と共に生きる～田中正造と南方熊楠～」「津波列島～忘れられた教訓～」「鈴木先生」「ほこ×たて『鉄球vs壁』
韓国「歴史ドラマスペシャル～ラングドン博士の歴史追跡～」「根の深い木」「南極の涙」　　中國「楚漢伝奇」「葉が落ちる長安」「私たち結婚しましょう～七夕の晩餐～」

第13回　2013年10月14日～17日　中国　無錫　　11　　旅・情け・幸せな夢
参加作品・日本「とんび」「希望の翼」「東北の冬」「ＹＯＵは何しに日本へ」　　韓国「学校2013」「勉強する人間」「お父さん！どこへ行くの？」「一定額所得者にとってベターライフの秘訣」　　中国「1972年、あの頃を探す」「「郷との約束」「徒歩で墨脱へ」

第14回　2014年９月15日～18日　　日本　横浜　　出会い―都市、文化、そして人間
参加作品・日本「基町アパート」「最終章を奏でる家」「熱中コマ大戦～全国町工場奮闘記～」　　韓国「星から来たあなた」「儀軌、８日間の祝祭」
「無限に挑戦」　　中國「生活永遠沸騰」「茶、一葉の物語」「漢字の英雄」
関連開催事業・東アジア文化都市番組上映会　参加作品・日本「多国籍、いちょう団地のいま」「吹奏楽はじめて物語」　　韓国「韓国紀行　光州編」
中國「東アジアの文化都市　泉州」
▼満洲の残留孤児を扱った「基町アパート」に対し、旧満州の表現について中國、韓国から批判。「９・１８（柳条溝事件）の前日に上映するとは！」と反発して、中国代表団は記念写真撮影をボイコット。

第15回　2015年10月28日～31日　　韓国　釜山　　アジアモデルの可能性

参加作品・日本「しくじり先生～俺みたいになるな！」「おやじの背中」「見えず聞こえずとも」　韓国「青春ＦＣハングリーイレブン」「町の晩餐」「ヨンパリ」　中国「武神趙子龍」「音楽の巨匠の授業」「田舎から見た中国」

第16回　2015年10月21日～25日　中國　北京　　家庭・青年の感情

参加作品・日本「老人漂流社会」「熱中コマ世界大戦」「いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう」　韓国「地獄の韓国」「私の小さなテレビ」「太陽の末裔」　中國「私たちの青春」「１年生、大学シーズン」「氷と火の青春」

第17回　2017年9月24日～27日　　日本　東京・上智大学　　田舎暮らし～都市と地方の問題を考える～

参加作品・日本「絆～走れ奇跡の子馬～」「鶴と亀とオレ」「島の命を見つめて～豊島の看護師・うたさん」　韓国「被告人」「覆面歌王」「青春・智異「山に暮らす」

第18回　2018年10月21日～24日　　韓国　光州　　よりよい共同体に向けた市民参加

参加作品・日本「アンナチュラル」「里山のふところ～生きるマンマ、おかわり！」「ブラタモリ・倉敷」　韓国「三代～延辺娘の東京定着記」「先にキスからしましょうか?」「ごま塩」　中國「天工開物～古代の秘法を探す旅」「人生一串」「狩場」　中國「三妹」「郷邑の世界・広西忻城を行く」「節気～四季折々・中国の知恵」

第19回 2019年10月29日~11月2日　　中國・貴州省興義　　多彩で多元的なアジア文明の多様性を守る

参加作品・日本「コッコデショ・平成最後の宝船」「移住50年目の乗船名簿」「チャンネルはそのまま」　韓国「こんにちは」「どこでも存在し、またどこでも見つけないジョン、氏闘と竜賢」「私の後ろにテリウス」　中國「中国詩歌大会」「粤劇の香り」「砕氷行動」

2020放送人グランプリ

西村与志木（放送人グランプリチーフ及び大山賞選考委員）

２０２０年の放送人グランプリは以下のスケジュールにて実施したいと思います。また放送人グランプリ選考委員は下記の方々にお願いしたいと考えております。また２０２０年の放送人グランプリの司会として、昨年に引き続き当会会員の露木茂さんにお願いいたしました。

スケジュール

2月会報　・『グランプリ下馬評座談会』を特集

会員投票用紙を同封し送付

3月16日（月）投票締め切り（電話・ＦＡＸ・お手紙）

3月30日（水）グランプリ選考委員会開催・12時30分～17時（千代田放送会館）

5月16日(土)放送人グランプリ・大山勝美賞授賞式及び懇親会

会場　千代田放送会館

大山賞選考日は別途設定

放送人グランプリ選考委員

矢島良彰（(新)新山賢治　(新)菅野高至（(新)

吉田賢策（(新)逸見京子（(新)三原治

桧山珠美　佐々木彰

八木康夫（大山勝美賞選考委員長兼務）

第77回放送人句会

令和元年10月1日（火）◇於　赤坂・麦屋

出席　伊藤視郎、林備後、佐々木光野、深尾一化、近藤久二、中村フミ、沼田道嗣改メ月世

以上7名

兼題　冬近し、月一切、きりたんぽ、振り付け（業界用語）

きりたんぽ湯気の彼方に母の顔　久二

背ナに聞く口説き文句や月を待つ　フミ

振り付けはモーリス・ペジャール ボレロ 秋　備後

振り付けの手拍子つなぐ虫の声　一化

月の影をんなの頬に射し入りて　久二

焼跡に隣人ありて月あかり　視郎

貧農の子沢山なりきりたんぽ　視郎

母握る飯の加減やきりたんぽ　光野

月明り影も一緒について来る　フミ

振付けを孫に習ひて秋日和　フミ

きりたんぽ女将の口上味の内　フミ

月の出は盃を重ねて高いびき　一化

窓際に陣取る猫や冬近し　フミ

行く人の靴音高し冬近し　フミ

作業衣のラジオ体操冬隣る　備後

亡き人の ムーンリバー を歌ふ宿　久二

日韓の気を揉む仲や冬近し　光野

コタンよりはじまる話キリタンポ　備後

冬近し始末の済まぬことばかり　一化

月天心タクラマカンの果つるなく　備後

逃亡のソ満国境冬近し　視郎

月照らす舞台前衛振付師　視郎

だまこ汁津軽おんなは話好き　備後

でこぼこと母の手想ふきりたんぽ　一化

振り付けを覚えきれない運動会　光野

冬隣る三軒先は葬礼社　備後

冬近し診察券の数は増え　一化

月の出や足摺岬露天風呂　視郎

次回放送人句会

○令和元年十二月二日(火)　十七時半頃から投句締切十八時半

○会場　赤坂・麦屋　星野先生がご出席されます

○兼題　おでん　狼　顔見世　ケツカッチン（業界用語）

第48回　名作の舞台裏
「花へんろ」特別編

春子の人形

～脚本家・早坂暁がうつくしむ人

日時　11月16日（土）13時半～16時
場所　横浜情報文化センター・情文ホール
ゲスト　板東龍汰（出演）
　芦田愛菜（出演）
　富川元文（脚本）
　平山武之（演出）
　司会・渡辺紘史（放送人の会）

「春子の人形」は、脚本家早坂暁が少年時代の体験をもとに亡き妹への思いと平和の尊さをテーマに創作した最後の作品。名作「花へんろ　風の昭和日記」シリーズの世界を新たな設定で描いた。

【物語】昭和初期の四国・松山。お遍路道に沿った商家の軒先に人形と一緒に置き去りにされていた赤ん坊は春子と名付けられ、良介と3歳違いの仲良しの妹になる。やがて戦争が始まり、良介は海軍兵学校に合格して針尾島分校から防府校に学ぶ。昭和20年夏、母静子に「良介は本当の兄ではない」と告げられた春子は8月5日兄に会うため広島へ向かう。

司会・渡辺　「名作の舞台裏」は今回48回目ですが、芦田愛菜さんはこれまでの最年少で、板東龍太さんは3番目に若い。他の3人は50歳以上年齢が離れています。そんなに世代の違う、それぞれの方のテレビ体験を語っていただこうと思います。

板東さんが初めてみたテレビ番組は何ですか？

板東　僕は家庭でテレビを見せないという教育を受けていて、テレビを見たのはおばあちゃんのうちに行ったときくらいで、初めてみたのは韓国ドラマの「チャングムの誓い」です。小学校5年生のころです。ですからテレビの世界は新鮮です。

渡辺　外国で育って、帰国して北海道ですね。

板東　はい。シュタイナー学園というドイツ系の少し変わった教育方針の学校に行きました。音楽や演劇をやり、外で遊び、キャンプなどやりました。自由に遊びまわっていましたがテレビやゲームには無縁です。

板東竜汰氏

渡辺　芦田愛菜さんの最初のテレビは？

芦田　最初に出演したのは「マザー」です。一つの作品としてみんなで作って行く、芝居の姿勢を教えてもらいました。

芦田愛菜氏

渡辺　教わった？

芦田　いえ、毎日怒られていた記憶です。「こうしなさい」「芝居はこんなものだよ」とかきびしく教えていただきました。

渡辺　見ていてそんな感じはしなかった。のびのびやっていた。

芦田　そうですね。のびのびやらせてもらい

渡辺　じゃ、テレビを見るのと演じるのはほぼ同時に始まった？

芦田　私の記憶ではそうです。同じころに始まります。

渡辺　一方、平山さんは1943年生まれ、富川さんは49年生まれ、私は44年です。このドラマの良介と春子が悩んでいたころの生まれです。

平山　昭和30年代、町内に一軒だけテレビを買った家があって、力道山とシャープ兄弟のプロレスを見たのが私のテレビ初体験です。そのうちには入れなくて垣根越しに見た。そのうちの方もご存知で、窓をあけておいてくれる。人だかりがして見ていました。

渡辺　ドラマ、フィクションに初めて出会ったのは映画ですね。

平山　映画は小さいときからみていますが、ドラマと意識してみたのは学生時代のアートシアターの実験的な映画です。私はNHKに入ったときはドキュメンタリー志望でした。地方の放送局で事件や事故を追いかけていました。あるときから突然ドラマがやりたくなりました。

富川　話がかぶるといけないので箇条書きで言います。テレビとの出会いは「ミッキーマウス」です。近所のお金持ちの家で正座して見ていました。その後が街頭テレビのプロレス、その後、ご成婚の映像を見るためテレビを買いました。その後、東京オリンピックがカラー放送だというのでカラーテレビを買いました。その後、「時間ですよ」でお風呂が写るというので熱心に見ていましたが、中学になるとテレビを見なくなり映画一辺倒になりました。毎週映画を2、3本見て、勉強は頼りなく、美術評論家になろうと思って美大へ行きました。しかし美術評論では生きて行けないので、ひょっとよそ見したときに見つけた脚本というものを書いてNHKの公募に応募したら入選しました。それ以降教員をしながら書き、教員をやめて脚本を書いたのですが、そのうちテレビが嫌いになり、書かなくなって20年くらいになるのですが、昔、早坂さんにお世話になったので、早坂さんに関することならなんでも手伝いますと言って、今回の話は「下書きでもゴーストでもいいですよ」と始まったのですが、結局、早坂さん原作、私の脚本ということになりました。かなり久しぶりのテレビの仕事です。

渡辺　こんな具合に、いろんな世代のいろんな背景を持った人が集まってテレビドラマという不思議なものができあがります。その人たちで「春子の人形」の話をします。まず、どんなきっかけで始まったかを…。

平山　早坂さんは80歳を過ぎて脚本を書いてなくて、あちこちから早坂ドラマを見たいとの声がありました。卒業ドラマとしてもう1本どうしても書いて欲しいという気持ちは何人もの人が持っていて、ときどき早坂さんのところへ行って「もう1本作りましょう」と話をしました。事件ものとかいくつかの企画が生まれたのですが、もう一つ8月6日関連でやりたいというプロデューサーがいて、その人と合体し、早河さんも考え、富川さん、私も考え「春子の人形」が浮かび上がってきた。

渡辺　平山さんは1977年の「冬の桃」が早坂さんとの最初の作品で、それ以来「花へんろ」第3章までずっとおつきあいがある。

富川　私は早坂さんとは渋谷の東武ホテルでの付き合いで、5，6年同棲？していた。東武ホテルにはいろんな作家がいたが、早坂さんは20年以上いた。ホテルのロビーでよく会いましたが、ロビーには局の担当がホン待ちをしている。あのホテルには裏口があって、私が外に出ると早坂さんも出てきて、サウナへ行ったり、麻雀やったりしていた。そのことを局の人にチクらないで、適当に時間を稼ぐのが私の役目というか、それが東武ホテルの仲間です。

私の世代では大先輩は山田洋二さん、倉本さん、勿論早坂さん、橋田寿賀子さんも怖いから入れておきましょう、そんな方たちが日本のテレビドラマを作り上げてきた。2番手に市川森一さん、池端さん、僕らとかになります。倉本さんはカッコイイものを書く。カッコ良さを気にする。山田洋二さんは緻密に、間違いのないホンを書く。それに対し早坂さんは間違いだらけのホンを書く。（笑い）その間違いがよく考えると整合性があって、ちゃんと繋がっている。つまり、人間って間違いだらけだ、そうやって人間として統一できているんだという人間の見方が早坂さんの特徴だし、魅力ですね。その早坂さんの魅力について行って私は書いきました。

渡辺　補足しますと、早坂さんは極めてホンが遅い人で、僕らはホンを取るためにカンヅメにする。カンヅメの場所が東武ホテルです。私も平山さんもそこで見張っていました。

平山　「花へんろ」のシリーズが第4までありますが、第3シリーズを私は担当しました。その中に早坂さんの少年時代があり、いとこが広島の原爆で亡くなる話がありました。その時、人の燐が燃える青い火を広島で見るシーンがありました。それと、いとしい人を亡くした後どう生きるかをやりたい、と私は思っていました。単なる8・6関連ではなくて、その後がやりたかった。

渡辺　いち子さんが東京へ行く。それから「ダウンタウンヒーローズ」が始まるわけですが、そこを描きたかった？

平山　富川さんのホンでは、最後に海岸で春子の幻影を追って海へ入って行くところで終わりますが、実はその後良介はいち子を追って東京へ行く、新しい生き方をするところまで描きたかったのですが、時間の関係もあってできませんでした。本当は「ダウンタウンヒーローズ」の主人公が松山から東京へ出て、警察に追われたり、渥美清と出会ったり、いろんなことがあるので、そっちの方がやりたかった。富川さんも同じ考えだったのですが、今回はこんな形になりました。

平山武之氏

渡辺　春子の幻影やお遍路さんや、あれは早坂さんのゾクっとするところがでていてよかったのだと思います。富川さんの筆力ですね。

キャスティングの話をしましょう。まず板東さんはどうやって選ばれた？

平山　ドラマは昭和20年という時代から始まっています。この年に海軍兵学校を卒業して終戦を迎える20歳くらいの役です。25歳以上の人が10代の役をやるのはあってもいいと思っていますが、僕は今の同じくらいの世代がどう考えてやるかに興味があったのでオーディションをやりました。何十人もの若い人に詩を読ませ、戦争について何を知っているかを語らせたりしました。板東くんは先ほど言っていましたが、テレビっ子じゃない。しかし自分を表現することが素直にできる。この子だと思いました。しかし彼はそのとき別の仕事が入っていた。海軍兵学校に行く役は頭を坊主にしなくてはいけない。しかも坊主のときとそうでないときを順番に撮るわけではない。そこらが大変だった。既に仕事が入っていて坊主には絶対できないというのを私は強引にプロダクションの社長に直談判し、マネージャーの方は頭を抱えていたのですが、何とか出ていただきました。

渡辺　板東さんはこの仕事を受けたときどうだったのですか？

板東　僕はオーディションのとき芝居は未経験でした。決まっていた仕事は映画だったのですが、まだ撮影は始まっていなくて、何の経験もないのに選んでいただいて混乱していました。僕が主役で大丈夫なのかという不安が強かったのですが、監督と1時間以上話して、戦争や当時の子供たちのことをどう思うかと聞かれ、この役をやりたいか？と聞かれました。ホンも読んでいたので「やりたいです」と答えました。するとマネージャーが飛び込んできて「坊主にはできません！」と叫びましたが、それでも「やりたい」と答えました。

渡辺　芦田さんの場合は？

平山　この台本を読んだ途端、これは芦田愛菜さん以外にない、と思いました。

芦田　春子さんの話は早坂先生の思い入れの深かった話だと思います。そんな作品に参加させていただけてまず嬉しかったです。早坂さんの大切だった人を演じるのは光栄なことだったと思います。

渡辺　難しかったでしょう。このドラマは戦後の話のなかに、戦争中、それ以前の春子さんが生きていたことがインサートされる。出番も多くはない。しかし春子さんを印象づけなくてはいけない。随分難しいと思いますが…

芦田　そうですね。早坂先生の中に生きていた春子さんはどんな人だったろう、と考えました。お兄ちゃんが勉強しているところへ自分の晩御飯のお芋を残して持って行く、やさしくて、純粋で、まっすぐな女の子なのだろうと感じていました。それをうまく表現したいと心がけました。

渡辺　今日は実は早坂さんの月命日です。12月16日に亡くなられて、来月の16日は3回忌です。

平山　この話を早坂さんとしたのは一昨年の春です。私は33歳のとき早坂さんと出会いました。その時の作品が「冬の桃」です。地方局に5年くらい居てから、ドラマ部に入り助監督の下のもう一つ下、3Kの職場にいました。揺れる船を押さえる、扇風機を持って走る、そんなことをやっていました。そんなとき早坂さんが「何か面白い話はないか？」と言うので、俳句の西東三鬼の神戸を舞台にした小さな原作を読んでもらいました。早坂先生はそれをとっても気に入って、「これをドラマにしたい」とドラマにし、その時から僕のドラマ人生が始まりました。それからずっと、年に何回か会って雑談をした。早坂さんは雑談の名手です。東武ホテルやその前の喫茶店で雑談をするのですが、3時間や4時間、あっという間に雑談で過ぎる。その雑談が面白いので、そのままホンに書いてください、と言うと、「うん」と言って、やはりホンは遅い。

渡辺　今回の「春子の人形」について早坂さんは何か書くつもりはあった？

富川　3分の1は早坂さんが書いた原稿があ

りました。「花へんろ」から引用、あるときひょっと思いついたワンシーンのメモ書き、それらを利用していかに組み立てるか、並び変えるかの構成がわたしの仕事です。楽と言えば楽だけどいい加減じゃ怖いので気を使いました。

富川元文氏

渡辺　断片で貰って、合わさると1本になっていることがありました。

富川　断片のそれぞれに思いは明確ですから。ホンの中で私の思いが入っているのは広島の話のなかにあります。戦争で日本のほとんどの都市は空襲、無差別爆撃で、多くの人が死にました。私の郷里もそうです。ヒロシマがクローズアップされて他の都市の被害はあまり語られないようですが、東京の死者の数は凄い。それを私はホンに盛り込んだつもりです。それを感じ取って貰えたらと思います。海軍兵学校の同級生に東京大空襲で焼け出され行くところのない男がいます。それと最後にお遍路さんで会い、すれ違う。これは私の思い、メッセージはここだけで、あとはみな早坂さんのメッセージです。

渡辺　お遍路さんに早坂さんを登場させるという話を聞いていましたが。

平山　富川さんのホンが出来上がって、早坂さんに「こうやってホンが出来ましたが、これは早坂さんご自身の話ですから、に最後は筆を入れていただきたい」と頼みました。ところが、ホンができた2日後に入院の予定があり、退院したら、ということだったのですが、入院の前日に亡くなった。亡くなるとは思っていなかったので、冒頭のお通夜のシーンは急遽入れた。加賀美さんの客観ナレーションがずっとあるので、早坂さんの一人称の言葉を入れるつもりが最初はなかった。亡くなってからどういうドラマにしようかと考えてあんな形にしました。最後のシーンは、早坂さんらしい人物が登場人物たちとすれ違うシーンにしたいと考え、早坂さんものって、毎日スクワットで体を鍛えているとのことでした。

渡辺　亡くなって、お葬式になり、山本圭さんの声が入り、「みんな夢の中」の映画が流れ、「うつくしむ」という言葉が説明され、いい感じで冒頭のシーンで主題がわかりやすく伝わってきた。

平山　クランクインは3月27日です。松山へは4月の半ばに3日間、田中裕子さんと板東くんのお遍路のシーンを撮りました。鹿が棲んでいる鹿島、早坂さんの実家の前の海にある島ですが、その島のシーン撮りました。鹿島には早坂さんの「昭和とはどんな流れの花へんろ」の句碑があり、その横に渥美清の「お遍路が一列で行く虹の中」の句碑があります。

渡辺　芦田愛菜さんはどこからの参加でしたか。

芦田　最初は四国の高知の海です。

平山　27日が最初です。

芦田　え?そうでしたっけ。

平山　そのとき、大変なシーンを4つか5つ撮りました。まず、駅のホームの雑踏の中で、「防府へ行くのは何番線ですか?」と聞いて歩くシーン。そして、防府へ行く汽車に乗れなくて、旅館を探して橋を渡る。それから、お兄ちゃんとの千人針。など大事なシーンを初日に全部撮りました。

渡辺　お兄ちゃんの部屋にお芋を持って行って、そのあとお母さんに兄妹ではないと言われる。あのとき平山さんは芝居について何か言いましたか?

芦田　春子さんは、脚本を読んで、一所懸命で、ひたむきで、純粋な女の子だと感じていました。お母さんに本当の兄妹ではないと言われて、お兄ちゃんを追いかけて行くシーンでは、それまで言えなかった春子の気持ち、お兄ちゃんへの思いがあらわれていて、私の好きなシーンです。

平山　僕は何も言ってません。

芦田　そうでしたね。のびのびやらせていただきました。

渡辺　板東さんは経験がない真っ白だというところでキャスティングされたのだけど、愛菜さんは凄いキャリアがある。「まなの本棚」という本を読みましたが、愛菜さんは本を読んで人はどんなことを考えているか、ひとの心の中を疑似体験できる、お芝居も疑似体験だと言っている。兄妹お互いに好きだとわかっているけど、兄妹ではないかもしれないと思っていたのか、難しいところがある。あのときのお母さんの話に応える春子の表情が微妙なんです。「え!そうなの!」という顔じゃない。自分に何度も問い返しをしている。お母さんも深い考えがあって言っている。それを受け取っているように見えた。どうなんでしょう?

芦田　ずっと兄妹として育ってきて、急にそうじゃないと聞かされると、最初は絶対戸惑う、本当なんだろうかとの疑いが出ると思います。その後に、今まで自分が抱いていた思いは抑えなくてもいいのだという喜びが沸いてくる。でも、それまで兄妹だった期間が長いから、本当にいいのだろうかとの迷いがある。その中に嬉しさがあり、兄にどうしても伝えたいという気持ちが出てきて、追いかけて「待ってるから!」と叫ぶシーンになる、と考えて演じていました。

渡辺　平山さん正解ですね。

平山　私はもう何も言うことがない。カメラは愛菜さんをずっとおさえている。我慢できるまで我慢している。13歳の少女の心の揺れ動きがあそこには出ていると思ったので、カメラの切り返しはしなかった。微妙に揺れ動きながら立ち上がって行くというのは演じる側にとっても、演出する側にとってもやり甲斐のあるところです。

渡辺　前のシーンからお母さんに思いを託しながら言わせている。

富川　あのシーンは役者が下手なら割るシーンを書きます。中途半端な役者がやるなら3カットくらいの描写の ト書きを重ねます。でもうまいから要らなかった。

渡辺　お母さんは良介に「這ってでも帰って来い」と言う。当時は「お国のために立派に死んでこい」と言うタテマエだったのだが、ホンネのことを言う。その裏で春子には兄妹でないことを言う。戦争中の母親の話としてよくわかる話だ。

板東　僕はキャリアがなくて、皆さんについていけないと考えこみ、悩んでいたのですが、監督はあのとき「君は真っ白いご飯だから選

んだんだ。周りのうまい人たちがおかずになってドラマはできて行くのだから、主演は読んだままを感じて自由にお芝居していいのだよ」と言われて迷いがなくなり、あの受けの芝居になったのだと思います。良介にも春子に対する気持ちはあって、帰ってくるのだと覚悟の顔につながったと思います。人に対する気持ちが交錯している場面ですね。

渡辺　あの正座しているシーンがあったから春子を失った悲しみがよく出ている。

平山　「白いご飯」は、早坂さんがよく言ってたことで、それを私が板東くんに伝えたわけです。

板東　それから、おかずばっかりやっています。（笑い）あのときはまだ撮影の前半だったので、凄く助かりました。

渡辺　板東さんにはいち子とのからみもある。ベッドシーンもあった。

板東　先ほど控室でマネージャーとみていたのですが、やはりあんなシーンは恥ずかしい。

渡辺　まだ、真っ白いご飯でしたね。（笑い）今も戦争の本を読んでいるそうですが…

板東　母方の祖母が広島で6歳のとき原爆を体験しています。良介を演じる前に電話して、細かいことをいろいろ聞きました。原爆資料館にも行き、特攻隊の小説を読んだりすると、当時の若い世代はいまの私たちとは覚悟が違う。今の僕たちの世代は覚悟がないとは言わないけど、目先のことに気持ちが散っていってしまう。当時の15歳は、方向が定まっていて、お国のために死ねるというのだが、どういうことか考えてもわからなかった。資料館の資料を見たり、体験した人に話を聞くことで、空っぽなところを埋めて行けたらと思いました。

渡辺　日中戦争から太平洋戦争まで日本人は３００万人戦争で死んでいる。中國人は兵、一般人あわせて１０００万人が死んでいる。死はいつも目の前にあった。だから生きることが大切で、お母さんは「這ってでも生きて帰って来い」と言う。春子は生きている間に思いを伝えようとする。そこらの必死の気持ちは、われわれはその時代に生きていたのだけど忘れがちです。その時代を演じるのは難しいと思うがよく演じました。

亡くなった人、いとしい人を忘れないためにお遍路に行く。お遍路がある限り日本は大丈夫だ。心が綺麗になり立ち直って行く、との台詞は早坂さんの、そして富川さんのメッセージです。

富川　早坂さんイコールお遍路とも思いますし、お遍路自体がそんなことなのですね。それを私なりにかみ砕いて言いました。言いたいことはもっとありましたが、ごちゃごちゃ言わないであのへんでおさめました。

平山　ラストに空海の「生まれ、生まれ、生まれ、生まれて、生のはじめに暗く、死に、死に、死に、死んで、死の終わりに冥し」という空海の言葉を入れようかどうしようかと迷って、結局入れませんでした。入れて「そうか」と思わせるより、良介が走り出して終わる方がいいと考えたのです。他にも富川さんが書いたのを、時間の都合もあってカットしています。最後に歌のカットが1分半ある。あれは早坂さんが好きな歌だったのです。カラオケに行くと必ず早坂さんが歌う歌です。何故この歌に早坂さんはこだわるのか、「春子の人形」をやってわかったような気がします。

渡辺　「喜びも悲しみもみんな夢の中…」。いろんな思いがこもっていますね。富川さんが、「あのへんでおさめた」というのも早坂さん流で、俳句の省略に共通するものがある。自由律の俳句を自由に解釈したり、この中で俳句がたくさん出てくる。俳句を早坂ドラマの武器にしたのが平山さん企画の「冬の桃」だと今日わかりました。松山と言えば俳句とお遍路。早坂さんらしいドラマができたと思います。最後に若い二人に聞きましょう。早坂さんの世界に入って何を今思いますか？

芦田　今回、春子を演じて、戦争によって当たり前だったこと、すごく日常的なことが全くなかったかのように一瞬で壊されてしまう、その怖さ、つらさを凄く感じました。私たち若い世代は知らない、知らないからわからない、知り切れていないことがたくさんあります。考えること、戦争についてもっと知ることが大事だと感じています。また、機会があって演じることができれば、皆さんに伝えたいと思います。

板東　「春子の人形」は今の僕を作っています。今の僕たちの世代には戦時中の方々の気持ちを理解するのははてしなく難しいのですが、少しでも伝えたいと思うきっかけになりました。もう一度戦前や戦中の時代を演じて、あの時代を生きてみたいと思っています。

渡辺　もう一つの質問です。10年後どうしていると思いますか？

板東　あれから1年半、いろんなお芝居もしたのですが、10年って長いですね。この番組の中に出てくる「まっすぐな道でさびしい」という俳句があります。いろんな解釈のある好きな句です。まっすぐで先が見えている人生でなく、曲がりくねって先が見えない、楽しいことも苦しいこともあり、難しい役にぶつかることもある、いろんな人に出会って、先が見えないけど楽しい人生にして行きたいし、もちろんお芝居は続けて行きたいと思います。

芦田　私は小さなことでも目標を持って努力する人になりたい。挑戦する気持ちを忘れず、目標を持って努力する人になっていたいと思います。お芝居は続けます。

渡辺　では、今日はこれで終わりに致します。

ラジオのページ

第14回「ラジオ聞き酒の会」実施報告

文化放送制作「報道スペシャル・戦争はあった」

報告者　三原　治

第14回「聞き酒の会」を10月10日(木)18時～20時に文化放送会議室をお借りして開催した。ラジオプロジェクトのメンバー12名が参加。試聴した番組は8月28日(水)19時～20時に放送されたラジオドキュメンタリー『文化放送報道スペシャル　戦争はあった』。担当プロデューサーの鈴木敏夫氏(編成局・報道スポーツセンター部長)と、冒頭だけ番組出演者のアーサー・ビナード氏(詩人・俳人・随筆家・翻訳家)も挨拶と番組紹介に付き合ってくださった。たまたま別件で、局に打ち合わせに来ていたところに遭遇して、ラッキーな偶然だった。

『文化放送報道スペシャル　戦争はあった』は、米国生まれのビナード氏が首都圏各地に残る戦争の記憶を呼び起こす場所を訪ね歩き、それぞれの謎を解き明かすようにレポートしていく。

この番組のきっかけは、小松左京の短編小説『戦争はなかった』(1974年発表)を読んで、戦争が風化されることへの危機感を強めたことらしい。

特番では、5つの場所を取材し、戦争の傷跡を辿った。

1、東京・巣鴨プリズン「絞首台はあった」

東京裁判で有罪にされた人たちを収容していた「巣鴨プリズン」は、冤罪も含む数多くの戦犯達が絞首台の露と消えたところだ。今では多くの人が行き交うレジャースポット・池袋サンシャインとなっている。

2、東京・成増飛行場「掩体壕(えんたいごう)はあった」

特攻隊員が出撃へ向けて訓練などをしていた成増陸軍飛行場は、戦後米軍に接収され米軍家族のための「グラントハイツ」という高級住宅地となっていた。その後返還され、今では「光が丘団地」「光が丘公園」となっている。

私は、30代の頃、10年以上住んでいたが、まさか目の前の銀杏並木が、滑走路だったとは、この特番を聴くまで知らなかった。

3、神奈川・相模原陸軍施設「将校の集会場所は今もあった」

戦前・戦中に軍都と呼ばれた相模原は、戦後、相模女子大学として生まれ変わった。小田急線の相模大野駅にある現在のキャンパスには、軍都の中枢とも言うべき通信基地があった。

4、埼玉・文化放送川口送信所「隠ぺい放送局はあった」

戦争中はNHKの送信所として、太平洋戦争における大本営発表の一翼を担っていた川口送信所。米軍がサイパンから放送する通信を妨害することも役割だったらしい。戦後、文化放送が引き継いだが、戦争の証拠は残してはいない。ビナード氏は、メディアの責任として残してないことも批判している。

5. 東京・陸軍中野学校「スパイの巣窟はあった」

戦時中でも隠れるように存在し精鋭のスパイの養成機関だった陸軍中野学校。現在はサブカルチャーの街、オタクの聖地として賑わっている。

私たちが生活するいろいろな場所に、戦争の傷跡が隠れている。過去、その場所で戦争があった事実を知ってほしい。今は綺麗な場所だが、そこで起こった忌まわしい事実を、権力者は「光を当てて見えなくする」。都合の悪いことは隠そうとする。しかし、その隠れたものを知ることこそ、「戦争を反省」することである。

そして、この特番には、被害者意識としての戦争ではなく、戦争をした加害者側の視点がある。

広島、長崎の原爆投下や東京大空襲をはじめとする日本の県庁所在地への空襲、沖縄戦など、被害者としての戦争は、毎年のように語り継げられる。反面、日本軍が中国大陸や東南アジアでやってきた残虐な行為「殺戮」は、語り継いできただろうか。

私が教えている大学生は、戦争があったことも危ういが、広島、長崎、沖縄で多くの死者が出たことは何となくわかっている。それは、8月ジャーナリズムのおかげである。しかし、日本の加害者としての立場は、まったくわかっていない。わずか74年前の私たち日本人は「人殺し」だったということ。国民のほぼ全員が、「鬼畜米英」「一億玉砕」と狂ってしまったこと。「お国のために死ぬことに何ら疑問はなかった」そんな時代。それが戦争である。被害者の感覚で反戦を語っても、今の若者たちには伝わらない。加害者の視点で戦争を論じたい。日本人は、とてつもなく酷いことをやってきたのだ。その反省のうえで未来を見つめて、語らなければならない。

8月15日は、終戦記念日。なぜか敗戦記念日とは言わない。「敗戦」という惨めさを薄めたいのだろうか。この日は、好きではない。靖国神社参拝しかり、全国戦没者追悼式しかりだ。追悼式で、政府は戦死者を英霊と讃えて、国の繁栄の礎とまで持ち上げる。これに疑問を持つ私は「非国民」だろうか。軍人は、戦争下においては、敵国の軍人を殺しても犯罪にはならない。でも殺人には違いない。人殺しは人殺しだ。それなのに、加害者が英霊になる。戦争は不条理だ。

「過ちは繰り返しません」の平和祈念の8月の行事には、意味があり意義もある。しかし、日本国憲法前文と戦争放棄の九条を無視して、「安保関連法」を成立させて、安倍政権はどんどん「戦争できる国」のかたちを既成事実化していく。

安倍首相は何でも隠す。森友問題も加計問題もなかったこととして逃げ切った。今また「桜を見る会」もしかり。戦争までなかったことにしたいのか。メディアはもっと抵抗して、異を唱え、権力の監視をしなければいけない。

ビナード氏の『戦争はあった』は、現在の日本社会への警鐘でもある。(放送人の会理事・日本大学藝術学部非常勤講師)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

放送人も「地域とゆるくつながろう」

佐野有利

10月に「地域とゆるくつながろう―サードプレイスと関係人口の時代」(静岡新聞社刊)を共著で出版しました。本書でいう地域とは都会や地方という二極化した意味ではなく①現在、居住している地域②ふるさととしての地域③現在居住もしていないし、ふるさとでもないが、何らか関わりがある、または自分がファンになっている地域、という3つを定義しています。サードプレイスとは職場でも家庭でもない第3の居心地のいい場所のこと(注1)です。また関係人口とは「長期的な『定住人口』でも短期的な『交流人口』でもない、地域や地域の人びととの多様に関わるもの」(注2)です。人生100年時代を迎え、地域とゆるく関わることで地域だけでなく自分自身も変わるのではないかが本書のテーマです。

今回、法政大学大学院政策創造研究科石山恒貴研究室の石山恒貴先生と所属する研究者で執筆しました。大学院は「地域づくり大学院」を標榜し、研究室は人的資源管理が専門です。

本書の中では北海道から九州まで首都圏だけでなく全国の、人と地域の多様な関わりが紹介されています。私は第8章で静岡県島田市の廃校を活用した事例を紹介し、考察しています。島田市川根町（旧榛原郡川根町）笹間地区は人口３００人ほど。高齢化率６割を超える中山間地です。小中学校は児童数が減り２００７年に閉校となりました。子供の声が町からなくなるということに危機感を覚えた住民たちは小学校を活用し「山村都市交流センター」を作りました。センターは教室にベッドや畳が敷かれて変わったところもありますが、体育館やナイター施設もそのままで研修や学生の合宿も盛んです。また地域の資源を生かした食べ物や催しも魅力で、格安な料金も手伝って町の訪問者は閉校前に比べ１００倍となりました。さらに国際的な陶芸家の訪問をきっかけに、国際陶芸フェスティバルが2年に1回、11月初めに開かれ、毎回数千人が来場しています。

私は番組制作者から広告営業へ移動した15年前に後に交流センター館長の北島享さん(78)と出会いました。北島さんは行政マンとしてまちづくりの経験が長く、当時旧川根町の副町長でした。私は川根町にサードプレイスとして関わり、人間関係づくりから人々の地域への思いを汲み取り、地域の広報や観光ガイドの制作に関わりました。そこで北島さんから数々の事を学びました。本書ではあまり言及しませんでしたが、学んだ1つが1つの事業という点から線を作り、そして世間に広がる面にしていく重要性です。1回の記事や番組で取り上げられても1つの点にしかなりません。さらに地域の現状を理解せず一面だけを取材して放送する姿勢への批判的視点も重要です。メディア側の取材対象者への取材への横柄さもあり、地域メディアはキーパーソンになりえていないようでした。その状況で地域メディアが「地域とともにある」と安易にうたっていいのか私は疑問を感じました。笹間の地域の思いを記録に残すことができないだろうか。そうした思いが編集者でもある私の筆を走らせました。

事実と社会の要請を独立変数として、企業の事情という調整変数によって報道や番組内容という従属変数がうまれるとしても、メディアは独立変数について正しくとらえられているのだろうか。そして経営や体面などメディアの都合という調整変数の影響が大きくなっているかもしれません。私はそうした日々の疑問から地域メディアを支える「人」について研究しています。

研究内容は番組制作者の能力開発、特にドキュメンタリー制作の学習過程です。意欲ある熟達者を調査してみますと、地域と関わりたいと思いながら、取材対象者との距離感で悩んでいる姿が見られました。ドキュメンタリーの取材をして本音を引き出し、放送後に「さよなら」で良いのか。意欲ある制作者は地域や人ともっと関わりたいようです。しかし先行研究ではこうした制作者の能力形成の過程について十分に明らかにされていません。制作者の能力もはっきりしておらず、ある地方局では制作者は成果物の良し悪しと、人手不足を背景とした作業の速度で能力が判断されているようです（注3）。

確かに番組制作とはコツやワザのような暗黙知の塊であり、研修などで学習転移できるものばかりではありません。働き方改革や人手不足も進む中でどのように人材育成をしたらよいのか。その解決方法の1つとして最近、組織の境を越えてアウェイで学習する「越境的学習」（注4）が注目されています。私の研究でも意欲のある制作者には越境的学習への意欲が存在することが明らかとなりました。組織を越えた場所（実践共同体といいます）で他者との関わりから学び、さらに学んだことを職場に持ちかえる（往還する）ことで職場学習も進んでいきます。そこでは思いがけない学びもあるでしょう。学習場所はインターネットや交流会もあります。もしかしたら地域のサードプレイスだったら、地域の声に謙虚に耳を傾けながら、前向きにゆるく地域と関わり続け往還することで、地域メディアが地域の中のキーパーソンであり続けられるかもしれません。地域から学ぶことは多く、私は今後も笹間をはじめとした地域の人々と関わり続けていくことでしょう。

放送人だからこそ、身近なところから地域とゆるくつながってみませんか。そのきっかけとして「地域とゆるくつながろう」を手に取っていただけたなら、望外の喜びです。

〈注〉

1、Oldenburg, R. (1989) The great good place, New York: Marlowe & Company（忠平美幸訳(2013)『サードプレイス』みすず書房）

2、総務省(2018) 『これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会報告書 関係人口の創出に向けて―』

3、厚生労働省(2018) 働き方・休み方改善ポータルサイト
https://work-holiday.mhlw.go.jp/case/

4、石山恒貴(2018) 越境的学習のメカニズム 実践共同体を往還しキャリア構築するナレッジ・ブローカーの実像 福村出版

（法政大学大学院政策創造研究科研究生。静岡放送・静岡新聞社出版部）

ラジオの危機をどうするのか？

石井彰（放送作家）

いまラジオは、あらゆる面で瀬戸際に立たされている。首都圏のセットインユース（全局聴取率）は今年8月調査で、とうとう5％台を割り込んで4・9％にまで落ちてしまった（10月調査で5・2％に復活したのは良かった）。ただここで聴取率の減少にについては注意が必要だ。現実に「聴取者が減っている」わけでなく、聴取率調査の数字から「聴取者が消えている」だけなのだ。

ビデオリサーチ社による聴取率調査は、男女12歳から69歳までを対象にしているため、数字のうえではラジオを聴いている高齢者が69歳をこえると消えていく。日本人の平均寿命が80歳を超えている現在、この69歳までという対象制限にはまったく合理性がない。いまだに広告業界などは「物を買うのは若者」という幻想に取りつかれていると言わざるを得ない。むしろこれから最大人口となる高齢者層こそ、日本の消費を支える主たる担い手ではないだろうか。本来ならばラジオ業界が一丸となって、この対象年齢制限は拡大すべきである。かつて永六輔さんの提唱から、対象年齢が69歳まで引き上げられた歴史があるからだ。

またラジオ局の売り上げは「前年割れ」がいまやあたりまえとなり、最もラジオ局全体の広告費が多かった１９９１年の２４０６億円から２０１８年は１２７８億円と、ほぼ半分にまで減少している。地方ラジオ局の東京支社営業担当者にきくと「スポット広告の落ち込みが激しい。特に飲料・トイレタリー・自動車などの分野から出稿ふぁ減っている」という。どんなに株価が見かけの上では高くても列島全体を（特に地方では）不況が襲っ

ている。さらに消費税の増税による悪影響が今後じわじわと広がっていくだろう。民放研究所の試算では、本年度のラジオ営業収入は2％減と予測している。

ほぼ30年間にわたって、広告費の減少が続いてきたラジオはどうなっただろうか。

まずラジオの人員と制作費が大幅に減らされた。その結果、番組の質が大きく低下して聴取者も減り続けてきた。そのため広告も減り、さらに人員と制作費の削減という「負のスパイラル」に陥った。このスパイラルを抜け出すにはどうしたらいいのか？

ＡＭラジオ業界では、多額の設備投資が必要となるＡＭ送信アンテナ他の更新が、経営に甚大な影響を与えると悲鳴をあげている。そのため放送免許の更新時となる２０２３年・２０２８年にＡＭ放送を止めて、ＦＭ放送に転換する構想をひそかに進めている。広大な土地（しかも湿地が望ましい）が必要となるＡＭ送信アンテナの更新は、たしかに多額の費用と時間が必要だ。またＦＭ放送のほうが高層ビルの中でも受信しやすく、音質も良い。ただＦＭ波はＡＭ波に比べて遠くまで飛ばすことができないため、多数の中継所が必要となる。現在ワイドＦＭを同時に放送しているラジオ局も数多くあるが、ＦＭでは受信できない地域が出現している。

さらに問題なのは、あらたに放送するＦＭ波の周波数帯が、テレビのアナ・デジ変換によって空いた周波数帯（ＮＨＫの1と3チャンネルが使用していた）を使うため、古いラジオでは聴取できないことを広言していない。しかも多数の中継所が必要となるため、大災害時に広域停電すると中継所の非常電源装置が燃料不足で機能しなくなる事例が千葉県の台風による停電で発生している。

こうしたことから地方ラジオ局の中ではＡＭ放送を継続する局も出始めている。あくまで聴取者の利便性を第一に考えて、今後の方向を決めるべきではないだろうか。

そして今年10月、衝撃的な事実が明るみに出た。エフエム東京が音質が良く映像も見られるデジタルラジオ「アイディオ」で巨額の損失を出していた。しかもこの損失を隠すため不正な株取り引きまでおこなっていたため、役員のほとんどが退任した上、この事業からの撤退を決めた。１０１億円もの特別損失を出したエフエム東京の経営苦境は、ただでさえ経営基盤の弱い地方ＦＭ局にも大きな影響を与えるに違いない。

こうした現実をふまえて、ではラジオは今後どうすればいいのだろうか？

ここは多くの体験と優れた見識をお持ちの放送人の会のメンバーから、前向きな議論を始めるのはいかがでしょうか。さしあたってのテーマは二つです。

一、なぜラジオが多くの人に聴かれなくなったのか。その原因は一体どこにあるのか？

二、ラジオをもっと多くの人に聴いてもらうようにするには、どうしたらいいのか。なにから始めたらいいのか。

ラジオ制作経験の有無にかかわらず、幅広い人たちたちのご意見をお待ちしています。ラジオを愛する人たちからの、厳しく暖かい原稿をお寄せ下さい。お願いします。さあとことん議論を始めましょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

わが自伝②

「日本の子供」のことなど

松尾羊一

たしか昭和27年だった。放送と言えばラジオだった。テレビはまだない。そのラジオだってのべつ幕なしに「番組」を生で「流す」ってしきたりを幹部たちは理解できないのだ。まだ骨の髄から活字で育った人間たちの時代だった。「番組とは何だ」。そこからはじまった。「活字文化」と「放送文化」を峻別し、放送文化の可能性を構想し、民放研究所をリードしていたのが野崎茂だった。野崎は敗戦間際に空襲を逃れて疎開してきた「鎌倉文化人」を取材していた。話を戻すと、番組を編成する連日の放送業務（編成部と言った）に新入社員の私は赴任。生意気盛りの小生はデンスケ（携帯録音機）取材の録音テープを駆使して、いわゆる「録音構成」という番組を作っていた連中（主として東大出身者）の刺激を受けていた。「だったらおめえ、社会部へいって録音構成とやらを作ったらどうだ」。そこで制作局へ配転だ。しかしこ難しい戦後変革論になじめない小生は子供たちの生態に目をつけた。下町の子供社会はガキ大将のヒエラルキーで成立している。子供社会を構造論から解明してみよう、と。総題名を「日本の子供」として番組ネットの地方各社の協力を得た。折から地方局育成に尽力していた野崎茂が興味を示し「四谷村」（文化放送）にやってきた。その野崎が亡くなって5、6年。放送は大きく変わった。いまや多次元文化のか細い末端機能に甘んじている。もはや巨大メディアの下僕に過ぎない。

ラジオ、それは私にとってかけがいのない青春の表現であった。

新人会員紹介

（入会日順・敬称略）

下村幸子（しもむらさちこ）63年10月生。91年ＮＨＫクリエイティブ入社。93年ＮＨＫエンタープライズ。ロンドンＮＥＰ派遣。チャリティー団体エイジ・コンサーン制作。担当番組、「Ｎスペ・移住31年目の乗船名簿」「地球法廷・核と平和」「ヒロシマ公園物語」「証言記録・東日本大震災」「もう一つのニューシネマパラダイス、トルナトレ監督とシチリア」「こうして僕らは医師になる～沖縄県立中部病院研修日記」「在宅死〝死に際医療２００日の記録〟」など。著書「いのちの終いかた、在宅看取り一年の記録」　現職・ＮＥＰ情報番組部エクゼクティブ・プロデューサー

古川重樹（ふるかわしげき）48年1月生。日本海テレビ放送出身、現職、中海テレビ放送特別顧問。主な受賞作品・「生命の絆」「直宏くんの挑戦」「老いて…いま」「みずほの里の隣人たち」「たそがれの風景」「カモミールの風」「クラウディアからの手紙」「ビスターレ」「クラウディアの祈り」「島取方式による校庭芝生化キャンペーン報道」「鐘の音の響く里で」「米子が生んだ心の経済学者」

鈴木芳夫（すずきよしお）48年8月生。71年ＮＨＫ入局。福岡局報道課。76年報道局報道番組部、外信部。モスクワ特派員（アンドロポフ、チェルネンコ、ゴルバチョフ書記長のころ）パリ支局長（ミッテラン大統領のころ）を経て考査室長。現職、ＮＨＫグローバルメディアサービス専門委員。

会員名簿

2019.11.29 現在

【あ】藍澤幸久　相田洋　相本芳彦　青木裕子　青山悌三　秋田和典　秋山豊寛　天野證範　雨宮望　新井和子【い】池田正之　石井彰　石井ふく子　石橋映里　石橋冠　石原信和　磯智明　板谷駿一　市岡康子　市川哲夫　市村元　伊藤博文　伊藤雅浩　井上佳子　井上良介　今井義典　岩澤敏　岩瀬弥永子【う】上村忠　浮田周男　碓井広義　臼杵敬子　【え】江川雄一　江口展之　遠藤利男　遠藤雅充　【お】大池雅光　大川光行　大蔵雄之助　大沢悠里　太田昌宏　大原れいこ　大類なぎさ　緒方陽一　岡野真紀子　岡室美奈子　岡本勉　小川治　小川和之　小河原正巳　沖野瞭　荻野慶人　尾田晶子　織田晃之祐　【か】加賀美幸子　柏木登　片岡敬司　加藤滋紀　加藤拓　加藤義人　金平茂紀　加納孝夫　川平朝清　鎌内啓子　亀谷弘美　鴨下信一　川喜田尚　川口健一　川渕惠子　河邑厚徳　【き】北川泰三　北川信　北川祐美香　北出晃　北村美憲　北村充史　木下浩一　木原毅　木村成忠　【く】工藤卓男　工藤英博　隈部紀生　倉内均　訓覇圭　黒崎博　黒沢淳　【こ】小池勝次郎　河野尚行　小玉滋彦　後藤和晃　小林和男　小山帥人　近藤一男　近藤邦勝　今野勉　【さ】斎藤秀夫　斎明寺以玖子　寒河江正　坂元良江　桜井均　桜井元　佐々木彰　佐々木光政　笹山正勝　佐藤敦　佐藤幹夫　佐藤理恵子　佐野有利　澤田隆治　【し】重延浩　重村一　重盛政史　静永純一　志津木敬　四宮康雅　柴田陽一郎　嶋田親一　清水誠　志村一隆　下崎寛　下重暁子　下村幸子　白井博　新山賢治　【す】菅野高至　菅野嘉則　杉田成道　鈴木俊樹　鈴木典之　鈴木弘貴　鈴木芳夫　鈴木嘉一　須磨章【せ】清野豊　関佳史　せんぼんよしこ　【そ】曽根英二【た】高島秀之　高田宏　竹中一夫　武本宏一　田澤正稔　田中昭男　田中秋夫　田中直人　田中典子　田中則広　田原茂行　【ち】千葉邦彦　【つ】塚原あゆ子　塚本茂　塚本幹夫　辻本昌平　土屋敏男　つボイノリオ　露木茂　鶴橋康夫【て】寺島髙幸【と】東城祐司　堂本暁子　戸田桂太　外崎宏司　富沢一誠　豊原隆太郎　鳥谷規【な】長井展光　中尾幸男　中込卓也　中崎清栄　中島僚　中島由貴　永田浩三　永田俊和　永野敏一　中町綾子　中村敦夫　中村克史　中村季恵　中村芙美子　中山和記　並木章【に】新村もとを　西憲彦　西村与志木　仁田豊文　仁藤雅夫　二宮文彦【ぬ】沼田通嗣【の】延江浩　信井文夫【は】萩原豊　林健嗣　林宣昭　林安二　原由美子　原田令嗣　【ひ】日笠昭彦　玄武岩　【ふ】深尾隆一　藤井チズ子　藤井正博　藤田知久　藤久ミネ　藤村忠寿　古川重樹【へ】逸見京子【ほ】　堀川とんこう　【ま】前川英樹　牧之瀬恵子　増山麗央　松尾羊一　黛りんたろう　【み】三上義智　水上毅　水野憲一　光原朋秀　三原治　三村景一　三村千鶴　宮崎洋　宮川鑛一　三宅恭次【む】村上光一　村上雅通　村上佑二　村田亨【も】本木敦子　元田成　諸橋毅一　【や】八木康夫　矢口久雄　矢島良彰　薮内広之　山鹿達也　山崎隆保　山崎裕　山路家子　山田尚　山田良明　山根基世【よ】吉澤保　吉田賢策　吉村豪介　吉村直樹【わ】若松央樹　和崎信哉　渡辺浩平　渡辺紘史

【賛助会員】　日本民間放送連盟　TBSメディア総合研究所　融合研究所　日本ケーブルテレビ連盟

忘年会のお知らせ

日時　2019年12月13日（金）18時半～21時頃

場所　青山 MarMare（マルマーレ）　渋谷区神宮前5・52・2青山オーバルビル B1　TEL：03・5464・7885

会費　5、000円

※当日会場にて頂戴いたします。

★会場の都合上、参加ご希望の方は11月末日までに事務局にご連絡下さい。

事務局から

事務局の御用納めは令和元年12月25日（水）、御用始めは令和2年1月6日（月）です。

編集後記▼日韓中制作者フォーラムが放送人の会にとって最後になって、分厚い特集になりました。多数の寄稿ありがとうございました。写真のページは菅野さんの撮影と編集で、辻本昌平さん撮影の写真も使いました。「プロのカメラマンの写真は場面ごとの画数、焦点深度、みな凄い」と菅野さんが感心していました。参加者の皆さん、スタッフの皆さんご苦労さまでした▼写真はカラー撮影なのですが、予算の都合でモノクロ印刷です。データを読み取っての印刷でなく、一度プリントアウトしたもののコピーが金曜日特別割引料金、28日29日30日が特別感謝デーだったので、画質が少し悪いのはお許しください。カラーでの原版はありますから、カラー版が欲しい方はご連絡ください。データで送るなど考えます（視）

第49回　名作の舞台裏

29歳のクリスマス

（94年10月～12月放送・フジテレビ）

【番組概要】主人公・典子（山口智子）の29歳の誕生日は、頭に円形脱毛症を見つけることから始まり最悪の出来事の連続だった。その晩、典子は雨に濡れながら、親友・彩（松下由樹）の部屋へ行く。そこには二人の共通の男友だち賢（柳葉敏郎）がいた。典子は二人にグチをこぼすが、彩も賢もそれぞれ悩みを抱えていた。

脚本（鎌田敏夫）は第13回向田邦子賞受賞。最終回、典子が彩に宣言する台詞は涙と共に明日への勇気を与えてくれる、今なお色あせることのない、女性へのバイブルとして語り継がれる伝説の作品。

日時　12月14日（土）13時半～16時半

場所　情文ホール（横浜情報文化センター6階）

ゲスト　山口智子（出演）
宅間秋史（制作）
鎌田敏夫（脚本）

司会　中山和樹（企画・放送人の会）

○会員で参加ご希望の方は事務局へご連絡ください。